

CBR公開研究会in名古屋

「CBRマトリックスを 使って考える」

支え合いコミュニティを作りだすために
～日本の福祉現場から、アジアの草の根での実践から～

報 告 書

日 時：2013年7月13日（土）10:00～17:00

場 所：名古屋国際センター別棟ホール

主 催：公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会

協 力：社会福祉法人むそう・NPO法人ふわり
一般社団法人草の根さえあいプロジェクト
公益財団法人アジア保健研修所
NPO法人起業支援ネット

後 援：全国生活協同組合連合会
国際連合地域開発センター
独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター
特定非営利活動法人名古屋NGOセンター



目 次

はじめに	3
プログラム	4
主催者挨拶	5
来賓のご挨拶	6
導入	10
プレゼンテーション 1 ナズムル・バリ氏	15
プレゼンテーション 2	
発表1 戸枝 陽基 氏	25
発表2 渡辺 ゆりか 氏	34
まとめの全体会	41
閉会のご挨拶	46
講師プロフィール	48
ファシリテータープロフィール	49
協力団体紹介	50

【会の模様】



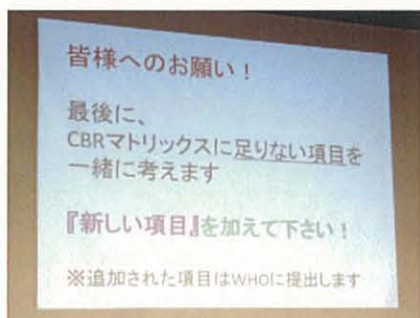
会場の模様



海外講師のナズムル・バリ氏（中央）と国内講師の戸枝陽基氏（右）、左は通訳の林かぐみ氏



国内講師・渡辺ゆりか氏（右）



グループワークの説明



グループワーク①



グループワーク②

はじめに

当協会では、ここ数年にわたり CBR（地域に根ざしたリハビリテーション）セミナーを開催して、CBR の概念の変遷や実践を伝えてきました。

CBR がその目的を CBID（コミュニティにおけるインクルーシブ開発）を推進することに発展したことは、2010 年に発表された CBR ガイドライン（WHO、ILO、UNESCO 他）で明らかにされました。CBID では、地域に暮らす様々な人が関わることで困難を抱える人達が地域社会に包摂されることを目指しています。

また CBR ガイドライン作成の過程で、一目で活動を理解できる CBR マトリックスが作られました。

そして 2013 年 7 月 13 日、名古屋において公開研究会を開催し、ご講演を聞きながら CBR マトリックスを体験していただきました。メインの講師にはバングラデシュの NGO（CDD：開発における障害センター）所長のナズムル・バリさんをお招きしました。

また、日本の事例として、愛知県半田市にある社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわり理事長の戸枝陽基さんと、名古屋市を拠点とする一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事の渡辺ゆりかさんから発表をいただきました。

この日は、様々な角度から参加者に CBR マトリックスに馴染んでいただきました。個人の生活の充足度やバリさんのご講演内容や、さらに日本の事例からもマトリックスを使って包括的な視点で活動を見直す機会になればうれしく思います。

今回の公開研究会開催に当たり、社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわり、一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト、公益財団法人アジア保健研修所及び NPO 法人起業支援ネットの皆様のご協力をいただきました。また、全国生活協同組合連合会、国際連合地域開発センター、独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター及び特定非営利法人名古屋 NGO センターの皆様のご後援をいただいて開催できましたことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。

この度、開催いたしました公開研究会の結果を本報告書にまとめましたので、ご高覧いただければ幸いです。

これからも当協会の事業にご支援賜りますようお願い申し上げます。

2013 年 12 月

公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会
会 長 炭谷 茂

■プログラム

【午前】

10:00 開会 主催者挨拶

来賓のご挨拶：国際連合地域開発センター 高瀬 千賀子所長

独立行政法人国際協力機構(JICA)中部国際センター 鈴木 康次郎所長

10:10 導入 ファシリテーター：鈴木 直也氏 NPO 法人起業支援ネット副代表理事

10:40 プレゼンテーション 1 「CDD(開発における障害センター)の経験：バングラデシュにおける障害の主流化（メインストリーミング）」

講演者：ナズムル・バリ氏 開発における障害センター(CDD)所長

【午後】

13:00 プレゼンテーション 2 「日本の状況を CBR マトリックスで見よう。」

発表①：戸枝 陽基氏 社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわり理事長

発表②：渡辺 ゆりか氏 一般社団法人 草の根ささえあいプロジェクト代表理事

コメンテーター：ナズムル・バリ氏

14:30 休憩

14:45 小グループでじっくりタイム ファシリテーター：鈴木 直也氏

16:20 まとめ

17:00 閉会のご挨拶：特定非営利活動法人名古屋 NGO センター 山崎 真由美副理事長

◆CBR 公開研究会 in 名古屋

「CBR マトリックスを使って考える」

支え合いコミュニティを作りだすために

～日本の福祉現場から、アジアの草の根での実践から～

◆主催者挨拶

上野 本日の司会を務めさせていただきます公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会の上野悦子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

CBR マトリックスを使って考える公開研究会ということで、バングラデシュから講師の方をお招きしました。今回の企画にあたりましては、社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわり、一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト、公益財団法人アジア保健研修所（AHI）、NPO 法人起業支援ネットの皆様にご協力をいただきました。本当に心から感謝いたします。

本日のプログラムでは、はじめに CBR マトリックスになじんでいただくセッションを用意しております。続きましてメインスピーカーでありますバングラデシュのナズムル・バリさんからご講演をいただきます。午後は、日本の現状を CBR マトリックスで見ようというテーマで、むそうの戸枝さん、草の根ささえあいプロジェクトの渡辺さんにご発表いただきます。そして休憩をはさんで、3つのグループに分かれて、ナズムル・バリさん、戸枝さん、渡辺さんと話し合ってください。そこでも CBR マトリックスを使っていただきます。

終了後はロビーで飲み物とスナックを用意しております。お時間のある方は是非お残りいただいて、ご講演者や参加者の皆さんとともに話し合いを続けていただければと思います。本日は Twitter 中継をしています。ハッシュタグは#CBR 名古屋です。スマートフォンからもアクセスできます。意見交換をしてみたいという方はフォローしてみてください。それから本日はアンケート用紙をお配りしておりますので、ご記入いただきますようお願いいたします。

以上が簡単ではありますが本日の趣旨になります。今日は聞き慣れない言葉がいくつも出てくるかもしれませんが、どうぞ気楽にお付き合いいただければと思います。

◆来賓のご挨拶

国際連合地域開発センター
高瀬 千賀子所長

上野 それではここでご来賓の方々よりご挨拶をいただきます。まずはじめに国際連合地域開発センター所長の高瀬千賀子様にご登壇いただきます。

高瀬 皆様こんにちは。名古屋に本部をもつ国際連合地域開発センター所長の高瀬と申します。公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会をはじめ、本日の公開研究会開催にあたってご協力なされている諸団体の皆様、本日はお招きいただきありがとうございます。

私ども国際連合地域開発センターは、その名の通り途上国の国内地域開発計画を通じて、持続可能な開発を促進しています。地域のスケールは扱う対象、または事情により異なります。例えば防災などではコミュニティ・ベースの防災計画・管理を促進しています。現在では CBR は CBID (Community Based Inclusive Development) を指すということで、今回の研究会のテーマはその意味で我々の活動にも反映されるべきものだと考えています。

今回は国連の取り組みをお話しするということで、私どものセンターを管轄しております国連経済社会局 (Department of Economic and Social Affairs、DESA) より挨拶を預かってきました。ここからは DESA のステートメントを代読させていただきます。

(DESA の英語のステートメントを代読)

上野 高瀬さん、ありがとうございました。それでは高瀬さんのお許しをいただきまして、今のお話をかいつまんで日本語にさせていただきます。

国連経済社会局 (DESA) のステートメントの内容 (抜粋)

—国連では DESA (経済社会局) が障害をもつ人々の権利向上や、社会や開発問題の中に取り入れるよう働き掛けて来ました。国連ではこれまで大変重要な文書が数多く採択されてきました。1982 年には障害者に関する世界行動計画、1993 年には障害者の機会均等に関する標準規則、そして、2001 年から障害者権利条約の交渉が始まり、2006 年に採択されました。障害者権利条約にも障害の問題を開発に入れることが重要だということが明記されています。ところが、障害者条約で示されたコミットメントは国際的に合意された開発目標にはまだ反映されておらず、そこがネックになっていました。

世界には 10 億人以上の障害者がいると言われており、これは全世界人口の 15% 占めますが、その多くが途上国に住んでいます。現在世界ではミレニアム開発目標

(MDGs) という、2015 年までに世界の貧困を半減させるという目標を始め、計 8 の開発目標の到達向かって取り組みがなされています。しかし、この開発目標や、それらを実施する為のターゲットや指標に障害は入っていませんでした。障害者は世界の開発の議論から排除されてきてしまったのです。

そこを何とかしようということで、国連をはじめ、いろいろな動きが出てきています。国連総会では障害者を組み込まなければ、国際的に合意された開発目標を真に達成することはできないと何度もいって来ました。そうした努力の結果、国連総会は今年 9 月 23 日に、障害と開発をテーマとしたハイレベル会合が開かれることになりました。そこでは 2015 年以降の開発のアジェンダにどのように障害を組み込んでいくのかなどのアクションプランが議論されます。

また障害者権利条約の第 6 回締約国会議が 7 月 17 日から 19 日まで開かれ、18 日には CBR をテーマとするパネルも予定されているようです。DESA としても引き続き障害者の権利が開発の中に含まれるように取り組んでいきます。本日の会議は国連の動きに沿うもので非常に期待しています。会議の成果として出てきたことは、提言のような形で国連をはじめとする国際社会に発信できたらと思います。

今回大きな励ましを国連からいただきました。大変嬉しく、また身の引き締まる思いであります。高瀬様、本当にありがとうございました。

◆ 来賓のご挨拶

独立行政法人国際協力機構(JICA)中部国際センター 鈴木 康次郎所長

上野 続きまして、独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター所長の鈴木康次郎様よりご挨拶いただきます。

鈴木 皆様おはようございます。独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター所長の鈴木でございます。公開研究会 in 名古屋「CBR マトリックスを使って考える」の開催、おめでとうございます。本日はこのような研究会にご招待いただき、ご挨拶の機会を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

本日の研究会で議論される予定の地域に根差したリハビリテーション（CBR）と地域におけるインクルーシブ開発（CBID）は途上国の障害者の社会参加を実現する上で大変重要なアプローチであると考えています。せっかくの機会でございますので、JICA のこれまでの取り組みについて簡単にご紹介させていただきたいと思えます。

JICA は、全ての人々が恩恵を受けるダイナミックな開発、Inclusive and Dynamic Development というビジョンの下、CBID と同様に障害者を含む全ての人々がコミュニティで生活し、経済社会活動に参加・貢献し、経済成長の恩恵を受けるような開発を目指しています。そのために不可欠な障害者の完全参加と平等を実現するため、2 つのアプローチからなるツイン・トラック・アプローチを行っています。2 つのアプローチとは JICA が実施する事業に障害の視点を取り入れるメインストリーム、さらに障害当事者のエンパワメントであります。

例えば建築物や公共施設におけるバリアフリー化はメインストリーミングの一つでありますし、障害当事者団体の評価や市民への啓発活動を通じてエンパワメントを進めているプロジェクトもあります。また障害者であるからこそその専門性を重視し、障害当事者である日本人の専門家やボランティアの途上国への派遣に加え、途上国の障害当事者の方々に日本に研修招待したりもしております。

このような JICA の活動は多くの方々に支えられています。本研究会の主催者でもあります公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会様とは 25 年以上に渡り、障害分野の研修の企画・実施をしています。その一つである障害者リーダーシップ育成とネットワーキングでは、途上国の障害当事者が自分の国でリーダーとして活躍できる人材となるよう、日本の障害当事者リーダーを講師に迎え、ピア・カウンセリングや公共交通機関の乗車体験等を行い、自らの力で周囲を変えていこうという意識の強化を図ってきております。

またバングラデシュでは、本日の講演者でもありますナズムル・バリ氏が所長を務めていらっしゃる開発における障害センター（CDD）の協力を得まして、バングラデシュに派遣される全ての JICA ボランティアを対象とした研修を実施しております。これは障害とインクルーシブ開発に関する理解を深め、JICA ボランティアが実施する様々なセクターの活動に障害者が参加できるように配慮することを目的としたものであります。障害のメインストリーミングを進めたいと考えておりました JICA バングラデシュ事務所が CDD に相談をし、実現に至りました。JICA ボランティアが活動する

行政機関やコミュニティにおいて障害者の声が反映されることが期待されております。

近年、経済成長が進む途上国の中におきましても経済格差の拡大、都市化による家族や地域社会のつながりの希薄化という問題が顕在化してきております。そのような中で、CBID のアプローチがますます重要性を増していると考えております。障害者やその家族が他の住民と同様に地域の活動に参加し、彼ら彼女らがもつ能力が評価され、豊かなコミュニティづくりに貢献できるような開発を進めていくことが大切であると考え、そのために JICA としても協力を続けていきたいと考えております。

最後となりますが、本日の研究会における素晴らしい経験の共有と有意義な議論を願いまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

◆導入

ファシリテーター：
NPO 法人起業支援ネット副代表理事
鈴木 直也

上野 続きましてオープニングセッションに移ります。ファシリテーターは NPO 法人起業支援ネットの鈴木直也さんをお願いいたします。

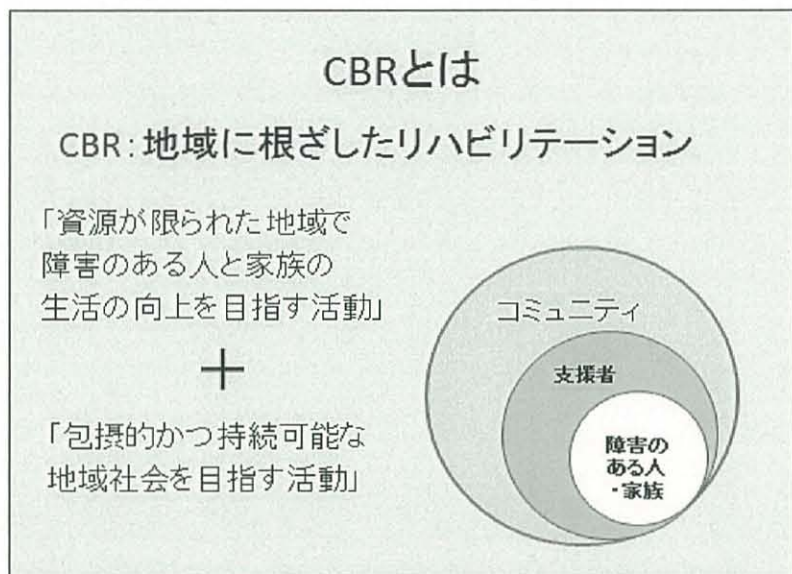
鈴木 皆さんおはようございます。起業支援ネットの鈴木と申します。よろしくお願いします。

今からは CBR マトリックスを使いながら進めていきたいと思います。この中で CBR という言葉になじみがないという方がいらっしゃいましたら、手を挙げていただけますか。半分近くいますね。CBR マトリックスとは一体何だろう、全くわからないという方もいらっしゃると思いますが、イベントの終了後には CBR マトリックスとはこういうものなんだと理解し、帰っていただくのが私たちの目標となっています。最初はわからないことばかりでしょうが、とりあえずそこは保留にしながら、最後にそうなのかという気付きを感じていただければと思います。どうぞ一日お付き合いください。

CBR とは

CBR について少しだけご覧ください（図 1）。障害のある方や家族を支援者がサポートしながら、生活そのものを豊かにしていきます。しかし、その時に支援者だけでは不十分ということがあります。地域のあらゆる資源や必要なものを巻き込みながら彼らを支援していくことがかせません。そうすると地域自体がつながり合い、結果的には包括的かつ持続可能な地域になります。

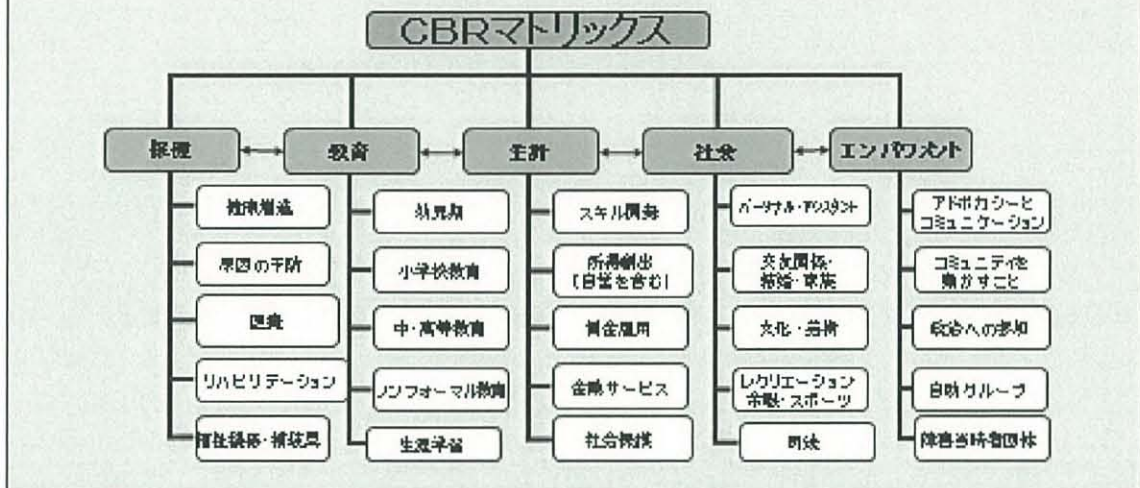
困っている方、障害のある方のためにしているサービスや活動が、同時に地域のためになっている。これが CBR の特徴です。はじめての方はこれぐらいのご理解（図 1）でいいのかと思います。



CBR マトリックスとは

CBR マトリックスとは

障害のある方の置かれた状況を 包括的に見るためのツール

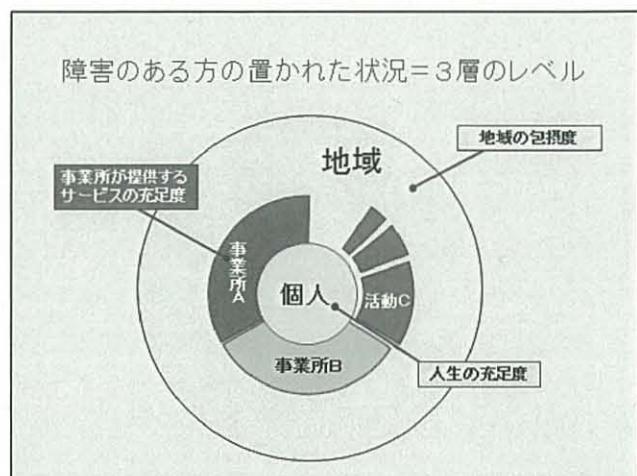


では、CBR マトリックス（図 2）とは何なのかですが、簡単にいいますと、障害のある方の置かれた状況を包括的に見るためのツール、俯瞰して見るためのツールです。（図 2）

ここにたくさんの丸印が付くと、その方はかなり包括的に支援されていることになります。印が全然付かないと、その方は社会的に孤立していることになります。ここに丸印がいくつ入るかということで、障害のある方たちの置かれた状況がわかります。ただし、障害のある方の置かれた状況というのは、いろいろな層で考えなければいけません。

3つの層で考える

そこで、今回は3つの層で考えてみました（図 3）。まずは本人、個人の方の人生の充足度ということです。次に事業所です。今日は事業所などで活動や取り組みをされている方が多いかと思いますが、皆さんの取り組まれている活動・サービスがご本人の充足度にどのぐらい貢献しているのか、また、どの部分を役割分担しているのか。事業所としてのサービスの充足度という形で見えます。ご本人



(図 3)

はいろいろなサービスや活動が使えるので、上手く使えると人生の充足度が上がっていきます。

最後は、地域全体としてどのぐらいの充足度になっているかです。これは包摂と書きました。この3層で考えていきます。地域にいくら資源があっても、ご本人が使えなければ、ご本人に届かなければ、これは無いも同じです。地域にあるが、個人にはないということもあります。地域になれば個人にはありません。この3つの層で少し考えていきたいなと思います。

今日は、事業所や困りごとを抱えたご本人の事例から、どのようにマトリックスを活用できるかについて、午後に事例検討していきたいと思います。

このような形で、個人レベル、事業所レベル・活動レベル、地域レベルの3つの層で、障害のある方の置かれた状況を考えていきます。

使ってみる

本日の公開研究会の目標・ねらいは、「とりあえず使ってみよう」です。料理を食べた時に食べた料理を言葉で説明してもなかなかわかりません。一度食べてみることで、そういう感じなのかということをつかんでいただきたいと思います。とりあえず、よくわからないからこそ使ってみようということです。使ってみたら何が見えるのか。そして、どんな使い方があるのか。どうすればもっとよい使い方になるのか。それを皆さんと一緒に考えていくというのが今日の一番の目的になります。

まずは最初のチャレンジとして、皆様の人生の充足度をチェックしていきます。お配りした資料の右上に「私の人生の充足度」というタイトルの付いた用紙があると思います。今から上野さんに項目の意味を簡単に説明していただきます。充足しているものには「○」、やや充足しているもの・使ったことのあるものには「△」、項目の意味がわからないものには「？」を記入してください。利用したことのないものは空白で構いません。例えば小学校教育を受けていれば、「小学校教育」には○が入ります。

それでは上野さんにボタンタッチします。項目の説明をしていただきながら、皆さんと一緒に記入していきたいと思いますので、ご協力のほどお願いします。

CBR ガイドラインと CBR マトリックス

上野 鈴木さん、ありがとうございました。

CBR マトリックス(前頁図2)は、2010年にCBRガイドラインが作られた際に考えられたもので、大きな項目としては、保健、教育、生計、社会、エンパワメントに分けられています。その中に更に細かく具体的な項目が書かれています。障害のある方や暮らしにくさを抱えている方たちが、地域の中で、地域の人々とともによりよい充実した生活ができるように使ってもらおう、ということで作られました。5×5で大変美しい形になっています。

CBRガイドラインは、保健、教育、生計、社会、エンパワメントの5つと、導入編、補足という7冊の小冊子から構成されています。エンパワメントについては少し違和感を感じるという方もいるかもしれませんが。エンパワメントは全てに渡る内容です。弱い立場に置かれた人がエンパワメントされていくということはどの分野でも起きてくることですが、わかりやすくするためにこの項目を作ったそうです。

CBR マトリックスの各項目

保健

それでは細かい項目を見ていきます。ここは理解しにくいのではないかとこの所だけご紹介していきます。まず保健のところを見てください。保健の項目として、健康増進、原因の予防、医療、リハビリテーション、支援機器（旧訳は福祉機器・補装具）とあります。ここはだいたい皆さんイメージがわきますでしょうか。健康増進の中には、健康診断を受けることができるというようなことも入ります。それからリハビリテーションには、生まれた時から障害のある方に対するサービスも入ってきます。

教育

教育には、幼児期、小学校教育、中・高等教育、ノンフォーマル教育、生涯学習があります。幼児期のところは誕生から小学校教育開始までで、早期療育も入ります。ノンフォーマル教育というのは日本ではあまり使われない言葉で、インフォーマルと間違われやすいのですが、ガイドラインによりますと公的な学校システムでない教育というふうになっています。例えば、日本ですとフリースクールなどが該当するのではないかと思います。もっと非公式な感じで、家庭や地域の中で、親御さんや兄弟などが学習を教えてくれるというのはインフォーマル教育であると説明してあります。生涯学習は言葉通り受け止めていいと思います。

生計

生計には、スキル開発、所得創出（自営を含む）、賃金雇用、金融サービス、社会保護があります。スキル開発というと収入を上げるための職業訓練のようなものではないかと思いますが、もっと幅広い内容になります。例えば基礎教育として読み書き計算というのにも入りますし、技術的・専門的なスキル、ビジネススキル、生活スキルも含まれます。生活スキルとは人間関係をよくするための対人スキルや、社会に出ていくための態度・知識を身に着けることです。

所得創出（自営を含む）は、英語で Self-employment となっていますが、自営といっても途上国の貧しい人たちはそれほど簡単にできるわけではありません。小さな収入源をたくさんつないでいくということになります。例えば家で何か作ってそれを外で売ること、日雇い労働、農作業労働、マッサージなどのサービス業などです。

賃金雇用には一般就労、作業所、保護雇用が含まれます。日本人には賃金雇用が最もなじみやすいかと思います。金融サービスは、途上国ではインフォーマルな形でお金が借りられることが多くあるために書かれたそうです。貯蓄、小規模貸付も入ります。隣の人からお金を借りるということも含まれているそうです。

社会保護は先進国では年金や社会保障になります。皆さんはそういうことでお考えいただいていると思いますが、これが低所得国になりますとインフォーマルなものがたくさん入ってきます。例えば食べ物、水、トイレ、住宅の供給などが入ってきます。

社会

社会には、パーソナル・アシスタント、交友関係・結婚・家族、文化・芸術、レクリエーション・余暇・スポーツ、司法になります。

パーソナル・アシスタントは、単に介助やそうした制度のことだけではなく、コミュニケーションと自己表現の技術習得なども入ります。インフォーマルな介助としては家族、隣人に手伝ってもらうことも入ってきます。学校・職場・社会など、いろいろな場面での個人的な支援も入ってきます。交友関係・結婚・家族は全体の核の一つであると書いてあります。人間関係を豊かにつないでいくということは誰にとっても重要なことですが、そのためにはコミュニケーション・スキルを上げていくなどいろいろな要素が入ってきます。

文化・芸術、レクリエーション・余暇・スポーツはご想像の通りです。司法は、差別や偏見を受けた時に司法の手続きにアクセスできるか、司法の手続きが取れるような準備ができているかどうかになります。

エンパワメント

エンパワメントは、アドボカシーとコミュニケーション、コミュニティを動かすこと、政治への参加、自助グループ、障害当事者団体になります。アドボカシーとコミュニケーションは、アドボカシーというのは障害者の権利や政策提言をしていくということで、マトリックス全体の中でもアドボカシーが言及されていますが、ここではセルフ・アドボカシーを示しています。自分のことを他の人にちゃんと伝えられるかどうか、自分の困っていることを人にわかりやすく説明できるかどうかということと、コミュニケーションということです。

コミュニティを動かすことは、人だけでなく、コミュニティにあるいろいろな資源、団体、グループを自分たちの生活環境が向上するように上手くつないでいく活動があるか、あるいはそういう支援を受けているかどうかです。政治への参加は、選挙、政治活動、団体間の力の作用も入ってくるようです。自助グループはインフォーマルな形でのグループということになります。最後は障害当事者団体です。

以上ですが、日本になじみのない内容も入っています。というのも、これは世界中で使われるものなので、それぞれの国でどこが合うかというのは使う人が考えればよいということです。ガイドラインを読んでもよくわからないということが随分出てきますが、これは日本に当てはめるとどうなるかということで、当てはまると思うところに印を付けていただければと思います。

鈴木 ありがとうございます。皆さん、印を付けていただけましたでしょうか。まずは1回目のチャレンジなので「？」が多かったかもしれませんが、ここで、同じテーブルに座っている方と自己紹介も兼ねて、マトリックスを見せ合いながら顔見世をしていただきたいと思います。2～3分ほど時間を取りますのでお願いいたします。

◆プレゼンテーション1

「CDD(開発における障害センター)の経験： バングラデシュにおける障害の主流化（メインストリーミング）」

開発における障害センター(CDD)所長
ナズムル・バリ

上野 それではお待たせしました。バングラデシュから来てくださいましたナズムル・バリさんをご紹介します。

ナズムル・バリさんは CDD（開発における障害センター）の所長をしておられます。そこでは開発の中に障害を組み入れていく研修、啓発活動、教材の開発などを行っています。31 ページに詳しいプロフィールを載せてありますので、ご興味のある方はご覧いただければと思います。バリさんは CDD での活動以外にも、国際的なコンサルタントとして世界を飛び回っていらっしゃいます。

今日はバリさんのお話をお聞きする時に、先ほどの CBR マトリックスをお手元に置き、バリさんの今のお話はマトリックスでいうどこに当たるのか、と考えながらご覧いただければと思います。お配りした資料の自分の人生の充足度の次をめくっていただきますと、右上のほうに「バリさんのお話から」と書いたものがありますので、それを開いてお話を聞いてみてください。なお、本日の通訳はアジア保健研修所の林かぐみさんが担当してくださいます。

ではバリさん、よろしくお願いします。

バリ 日本に来るのは3度目ですが、その度にとても嬉しい気分になります。来るたびに日本が随分発展している、進んでいることに驚きます。バングラデシュとは大変違う状況です。何もかもがきちんと組織立っていて、皆さん正しく振る舞われる。それから1箇所から次の所に行くのに非常に速く行けます。昨日は半田市を訪れましたが、行きは電車で、帰りは車でした。ちょっとうたた寝をしている間に100キロぐらい行ってしまいます。ダッカですと道は悪くて混んでいますので、例えば寝ていてもまだ3キロぐらいしか進んでいないというような状況です。車も多く、混んでいますし、人も多いです。

これからプレゼンテーションを始めますが、その前に、これまで発表された皆さんに感謝を述べたいと思います。先ほどから CBR マトリックスを使って皆さんに作業していただいています。上野さんがおっしゃったように、皆さんが行っている様々な活動のどれがどんなふうに CBR マトリックスの項目に当てはまるのか、ということを考えていただければと思います。

CBR は一つの団体、一人の人によって行われているものではありません。様々なアクターがかかわっています。バングラデシュではどう行われているか、私たちがどのようにコミュニティに手を伸ばそうとしているのかについてお話しします。

バングラデシュの概要

バングラデシュ



(図 1)

- 人口: 1億5,250万人(2012年7月現在)
(BBSバングラデシュ統計局)
- 人口密度: 1,015人/平方マイル(BBS)
- 人口密度(首都ダッカ): 8,111人/平方
マイル(PHC2011)
- 人口増加率: 1.34%(PHC2011)
- 世帯規模: 4.4人(PHC2011)

まずは私の国、バングラデシュについて少し触れます(図1)。先ほど人が多いと言いましたが、人口は1億5,250万人です。1平方キロメートル当たりの人口密度は1,015人です。首都ダッカの人口密度はその約8倍、8,000人以上です。人口は増加しており、しかも加速しています。人は農村から都市部、特にダッカに移動しており、農村部の人口の流出が起こっています。1世帯の平均規模は4.4人です。統計によると32%の人々

が貧困線以下の生活をしています。少なくとも人口の70%が農村に住んでいます。バングラデシュの縫製産業について聞かれたことがあるとは思いますが、労働人口の66%はいまなお農業に従事しています。私たちにとって食糧の安全保障は大きな課題です。貧しい人たちの1日当たりの収入の6割は食べ物に費やされます。

15歳で読み書きができる人たちは56%です。平均寿命は68歳です。安全な飲み水の確保は大きな課題ですが、いまなお20%の人たちが手に入られません。人口の50%は衛生的な環境で暮らすことができません。井戸水がヒ素に汚染されているという問題もあります。海の水面が上がり、海水が内陸部に入ってくるという状況が起こっており、塩害も問題になっています。私たちの国にはいろいろな災害があります。ただし、雪に関してはありませんが。まるで災害のレストランのようなものです。ひとたび大きな洪水が起これば国土の7割が冠水してしまいます。水浸しの状態になった時は、道路は車で混雑するのではなく、ボートで混雑します。

障害の現状

それでは障害について話を進めていきます。私たちにはあまり信頼できる統計データがありません。最新の国勢調査によると障害をもっている人は人口の1.4%といわれています。人口の1.4%というのは国勢調査から上がってきた数字ですが、障害者団体はこんなに低いはずはないと申し立てています。2005年にNGOが調べた調査では5.6%でした。障害の種類による内訳は、視覚障害が一番多くて32.2%、身体障害が27.8%です。ただ、私たちはもっと広く他の統計に当たる必要があります。例えば「World Disability Report (障害に関する世界報告書)」では人口の15%が障害をもった人としています。

障害分野の現状について他のことも述べたいと思います。最初は政策と法的な枠組みです。バングラデシュは選択議定書を含む障害者権利条約を批准した最初の国の一つです。バングラデシュではこの条約に基づいて障害者の権利に関する法律を制定する過程にあります。内閣は通りましたが、まだ国会には上程されていませんので、今のところ、この先どうなるかはわかりません。1995年以来、バ

ングラデシュには障害者政策があり、2001年には障害者福祉法ができました。しかし、それを守らなくても罰則がある訳ではありません。ですから障害当事者、あるいは障害者団体はそれでは効果がないと言っています。

バングラデシュでは障害分野は社会福祉省の管轄になります。また「Disability Rights Watch Group」という市民団体のグループがあり、障害をもった人たちのための権利擁護の状況について調査しています。国会にも障害分野に取り組む議員から成る障害委員会があります。障害分野のための予算割り当てが始まりましたが、その割合はごくわずかで年間予算の0.09%だけでした。障害手当など障害者のためのセーフティネット・プログラムもいくつかあります。障害手当は月額300タカ（約400円ぐらい）です。他にも、障害をもった人への優遇策として、例えば、金利ゼロのマイクロクレジット（小規模融資）もあります。でも問題は、非常に多くのことが求められていても、一方でそれに充てられるものはごくわずかだということです。そのギャップがあまりにも大きいのです。

障害をもっている人たちのためのリハビリテーション・サービス、療養施設などもほとんどありません。サービスの大半は都市部に限られており、農村部の人たちは受けることができません。大病院であっても障害をもっている人たちが受けられるような治療や他のサービスがありません。そのほかにも様々なものへのアクセシビリティが大きな問題です。例えば建築物に入るための利便性が悪い、交通手段が利用できない、コミュニケーション手段が手に入らないなどという状況にあります。教育の問題も非常に大きな課題です。特に聴覚障害をもっている人たちにとって教育は大きな問題です。障害をもった女性は周辺に追いやられている状況にあります。また、障害をもった人たちに対する虐待もよくあります。

CDD の概要

今までとてもネガティブなことばかりお話ししましたが、ポジティブなこともいろいろあります。まずはCDDについて話しましょう。CDDは1996年に設立されました。私たちの団体の目的は障害をもった人たちのインクルージョンを実現していくために、能力を強化していくことです。135名の職員がいて、そのうち9%は何らかの障害をもつ人たちです。CDDはNGO、障害者団体、企業、政府など様々な機関と連携を組み、3つの大きな分野で協力しています。1つは障害をメインストリーム化（主流化）すること、2つ目は障害をもった人たちのためのリハビリテーション・サービス。そして3つ目は障害をもった人たちや家族をエンパワーすることです。私たちが目指しているのはインクルーシブな社会であり、インクルーシブな開発です。そのためにはこれら3つを組み合わせる必要があります。

CDDは幅広い活動をしていますので、それについてお話しします。まずどんなふうが始まったか。先ほどからお話ししているように、バングラデシュには障害をもった人たちが数多くいますが、貧困が大きな問題になっています。人口の大半が農村に住んでおり、その人たちにはどのようなサービスも届きません。障害者団体の数が限られており、障害分野に活用できる国内の資源も限定されています。では、一体どんなふう to これらの課題に対応していけばいいのか。大きな問題です。それを自分自身に問いかけてみたところ、2つの疑問が出てきました。まず、なぜ障害をもった人たちは除外されるのか。2つ目、開発活動に関わっている人たち（アクター）は全ての人の開発のために働きながら、どうして障害をもっている人たちを含めないのか。私が開発組織について以前話していたことですが、開発組織は障害をもった人たちについての全く敏感ではなく、訓練を受けたリソース・パーソ

ンもおらず、知識ありません。これは彼らの問題の一つです。

障害をもった人も皆さんや私と同じ権利を持っているということについて、皆さんも同意されると思います。教育、雇用・仕事、安全、健康について、あるいは考えつくことは何であれ、障害をもっている人も誰もが同じような権利を持っているのです。しかし、私が既にお話ししているように、障害をもった人たちの状況はそれほど期待が持てるものではありません。

なぜ除外されるのか

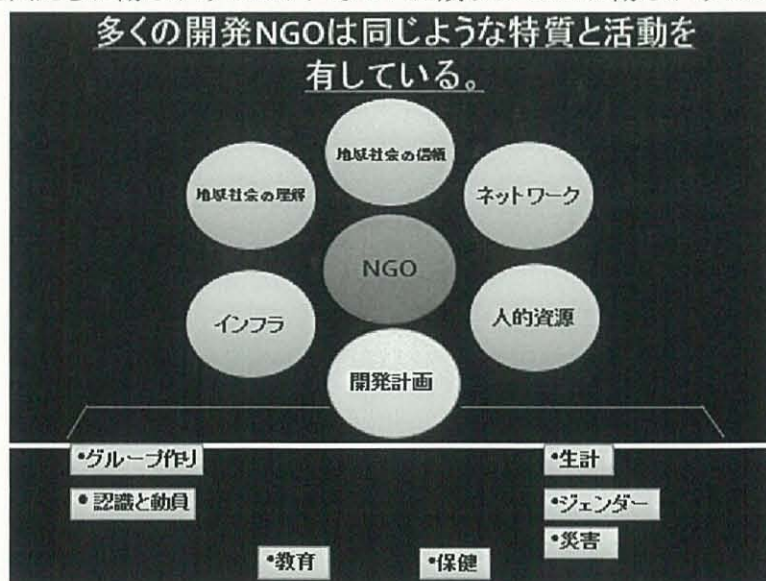
なぜ障害をもった人たちが除外されてしまうのかということについては、3つの要因があると思います。1つはリハビリテーション・サービスの不足です。治療が受けられないのです。2つ目は、社会が障壁を作ってしまったことです。壁があるのでその人たちを受け入れようとしません。環境面での障壁、物理的な障壁、交通の問題などです。ここ日本は大変アクセスが良いのですが、バングラデシュのような途上国ではそうはいきません。制度や政策もまた障害をもった人たちにとって障壁になっている場合もあります。例を挙げてみましょう。子どもたちが学校に行くということを考えてみても、「もちろん私たちはどんな子供でも受け入れる」と言いますが、実際はその子どもが自分で学校に来ることができる場合に限られるのです。また、小規模融資もその方針はあまり励みになるようなものではないことがあります。

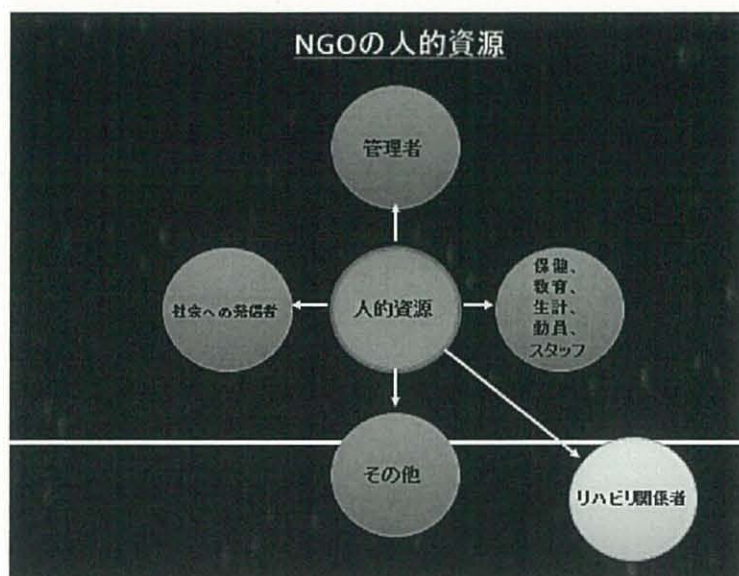
3つ目の要因は、障害をもった人たちが自分自身を無力だと感じてしまうことです。自尊心、自分への誇りが持てない、モチベーションが高まらないのです。なぜなのだろうという疑問が出てきますが、考えてみれば障害をもっている人たちはあまりに長い間除外されてきました。社会が除外してきたのです。社会が自信をなくさせる一因になっていたのです。全ての要因が、除外へとつながっているのです。

NGO との連携

次に出てくる問題は、このままでいいのか、あるいはそれを変えていくのかということです。そして自分自身に問いかけるのです。このような状況を変えようとするなら、誰に対象を絞って働きかけるのか。人口の15%の障害をもった人たちに働きかけるのか、あるいは残りの85%に働きかけるのか。障壁は社会の中にあるのですから、人口の85%のほうに働きかけなければなりません。もちろん障害をもった人たちにも働きかける必要があります。具体的には開発に取り組んでいるアクターすべてと協力して、この問題に関わっていくべきだと考えています。その次に、開発に携わっているすべての関係者、NGO と政府が挙げられます。

このような理解のもと、CDD





(図 3)

は社会に変化を起こすことを目的に1996年に組織として出発しました。私たちの重要な目的はNGO(図2)との連携でした。NGOが行っている開発プログラムを見ますと、グループ作り、啓発、動員、教育、保健、ジェンダー、災害などの問題に取り組んでいます。ですから、このようにさまざまなプログラムを持っているNGOに、障害分野についての感度を高めさせるという観点から能力強化を図れば、インクルージョンが始まる可能性があるのです。国内で活動しているNGOの大多数は同じ

ような性質と活動内容を持っています。

NGOの持つ人的資源(図3)を見ますと、まず、管理者など責任者クラスの人たちが障害問題について研修を受け、次にソーシャルコミュニケーター(社会への発信者)や啓発に関わる人たちが障害分野の研修を受け、障害問題に関する自らの意識を向上させることが出来ます。

次に、ほかの分野の活動に携わっている人たち、先ほどの話に出た学校の先生たちも、障害をもった人をインクルージョンするように研修を受けることが出来ます。先ほどリハビリテーションのことを話しましたが、バングラデシュでは理学療法士の数がそれほど多くはないので、リハビリテーションの訓練を受けた人も必要です。

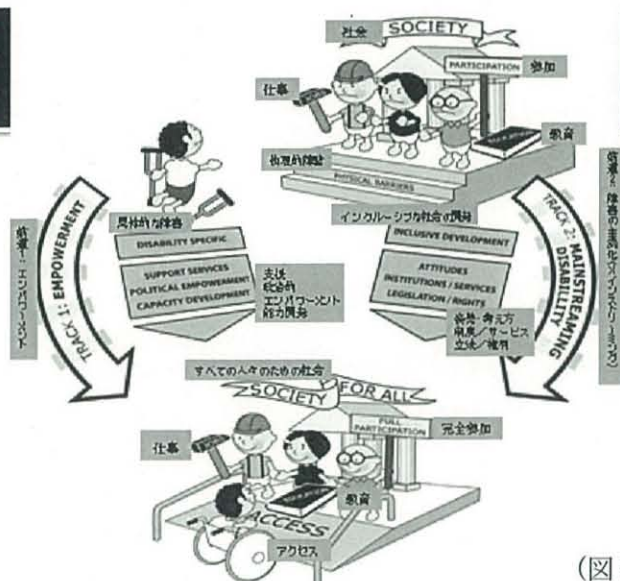


(図 4)

これまで、なぜ除外(エクスクルージョン、exclusion)されているのかについての原因を話してきましたが、今述べた方法を実行出来るなら、インクルージョン(inclusion)に向かって進むことができます。開発分野及び障害をもった人、その家族に具体的に求められているのは、ここ(図4)に示されている通りです。左側半分は開発組織への、右側半分は障害をもった人たちへの働きかけを示しています。

障害のメインストリーム化

障害をもった人たちに働きかける上で、障害のメインストリーム化は必要な側面の一つです。ですから、幸せな社会を見たいのであれば、メインストリーム化、エンパワメント、リハビリテーション・サービス、これらすべてに取り組む必要があります。先ほどお話ししたように、メインストリーム化のためには、社会の中にある様々な障壁を無くして、人の姿勢を変える必要があるでしょう。スライド(図5)の絵の一番上ですが、物理的な障壁があって、この



(図5)

3人の態度はあまり嬉しそうではありません。それからここでは政策にも触れていますが、必ずしもインクルーシブではない。メインストリーム化のためにはこれらの分野を変えなければならない。エンパワメントのためには、工夫して自信を付けるようにしなければならない。このメインストリーム化とエンパワメントの2つのことが取り組まれていく中で、私たちの目標であるインクルージョンが達成されていくのです。

NGO 及び行政関係者への研修

次に、CDDの活動についてですが、私たちが働きかけの対象にまず行っているのは、啓発活動です。その組織の気づきの鋭敏化を図り、管理職に組織内で障害のインクルージョンに取り組んでもらうのです。多くの団体が連携を求めてきますが、それに全部応えることはできませんので、ある一定の基準に従って審査します。そして数を絞り込んで協力関係に入ります。

私たちの主な活動の一つはNGOや行政関係者への研修です。参加者はコミュニティ・レベルからやってきますので、研修終了後は、それぞれのコミュニティに戻り、障害をもった人やその家族へのサービス提供者となります。研修内容は、障害予防、療法の行い方、福祉機器、教育、生計、防災、ジェンダーなど非常に多岐に渡っています。研修を担当するファシリテーターには障害をもっている人もいますので、参加者に非常に大きな影響を与えています。研修には国際的な組織から草の根レベルの団体まで参加しており、マネージャークラスの人もいます。

啓発研修のために音声、ビデオ、印刷物、CDなど様々な教材も作成しています。コミュニティでは、訓練・研修を受けたワーカーが様々な方法で啓発活動を推進しています。会合、ロールプレイ、ストレートシアターといわれるものをしたり、ディスカッションしたりしながら、いろいろな方法で人々にそのことを伝え、考える場を作ります。ここでも障害をもった人たちが自身がファシリテーターとして活躍しています。訓練を受けたリハビリテーション・ワーカーが障害をもっている人たちの自宅に出かけて行き、療法を実施することもあります。彼らは介助者やパーソナル・アシスタントにス

キル訓練をすることもあります。子供の場合は、母親や祖母がその役割を果たしていることがほとんどです。

CDD の様々な活動

バングラデシュでは船を使ってしか行けない所もあります。欧州委員会の支援を得て、船を使って各地を回り、リハビリテーションなどを実施する活動もしています。この船（写真 1）の中で理学療法、作業療法、目の検査などあらゆるサービスを行っています。

また、車の中に様々な設備を取り付けて、巡回活動を行っています。私たちの研修を受けた団体をパートナー団体と呼んでいます。パートナー団体の所に行ったり、その地元の自治体と連携したりして活動を行っています。私たちが始めた活動ですが、現在は政府がこうしたことを行い国中に広めようとしています。私たちは同じことをする必要はないと思いますので、これは終了しました。



保健・リハビリテーション活動（船舶）

（写真 1）

CDD では福祉機器を製作するためのナショナル・リソース・センターも持っています。車いす、三輪車、義肢、コナーチェア、松葉杖など、様々な福祉機器がここで作られています。障害をもった人がここで訓練を受け、就職するということもあります。ここでは外科の手術も行われています。口唇口蓋裂という障害をもつ子どもが毎年 5000 人生まれるといわれていますが、私たちはそのうち 1200 人の子どもに手術を行っています。

最近では教育プログラムも提供しています。政府の教育制度に協力する場合もあれば、他の NGO と連携する場合もあります。また、先生に対する研修も行っています。学校におけるアクセシビリティの問題や先生たちが障害を持つ子供に教える際の教材開発などにも取り組んでいます。私たちは学校教育とノンフォーマル教育の両方に対応しており、初等教育から中等教育、大学院に至るまでカバーする教育プログラムがあります。また、来年からになりますが、小児期早期発育に関するプロジェクトを開発しようと考えています。

さらに、障害をもった人たちもきちんと生活ができるように生計の手段を確保するための訓練もしています。商売を始めたり、必要なものを購入するための小規模融資を利用できるようにしています。また、障害をもった人たちが何らかの支援を受けられるように様々なセーフティネット・プログラムもあります。また、大学教育を受けた人たちが仕事や雇用機会を得られるように、企業との橋渡しも行っています。

サイクロン、洪水、地滑り、河川浸食など、災害は非常に大きな問題です。政府に対して強く働きかけて、災害対策には障害をもつ人たちを視野に入れるようにと要請しています。シェルターも建設されているのですが、障害をもっていると使えない状況でした。どのようなものであれ、災害時の計画を立てる時は障害をもつ人たちの声が反映され、それが政策に取り入れられなければなりません。そして計画はすべてインクルーシブなものになるべきです。また、私たちは国際的な政策提言も行い、国際的な枠組みに障害をもつ人たちに対する災害対応を含めることを求めています。

さらに、障害をもつ人たちに必要なのはリーダーシップ、スキル訓練、自助グループ、障害者団体の支援であることから、エンパワメントにも熱心に取り組んでいます。

以前は障害をもっている人で投票したり、政治活動に参加する人は限られていました。しかし鋭敏化活動の結果かもしれませんが、今は投票に行くようになりました。更には障害をもっている人が候補者になり、選挙に出るといったケースや、あるいは選挙に当選して政治家になるというようなケースも出てきています。

障害をもつ人たちが集まって、障害をもつ子どもや女性への虐待・暴力に反対を訴えていこうという動きもみられます。さらに、視覚障害と聴覚障害を同時にもった人たちへの対応も大きな課題です。この問題については、どんなことであれ可能な支援をしていくつもりです。

バングラデシュでは統一された手話がまだありません。いくつかの関連団体が手話の標準化に取り組んでいるところです。視覚障害の人たちへの点字については、子どもたちが教材を点字で学べるように支援しています。以前は点字を打つための点字板を輸入していたのですが、かなり高価でしたので国内で作り始めたところ、以前の3分の1の価格にすることが出来ました。

アクセシビリティは大きな課題であると言ってきましたが、こんなふうにできるというデモンストレーションをすると、それが広がっていきます(写真2)。

この写真(写真3)は国際的な災害対策についての権利擁護活動の集まりですが、グローバルなレベルだけではなく、草の根レベルでも権利擁護活動を行っています。

マグサイサイ賞受賞

私たちのこれまでの活動が評価されました(写真4)。2010年、CDDと代表者ノーマン・カーン氏(写真右側の人物)がアジア版ノーベル賞であるマグサイサイ賞を受賞しました。これが示すように、バングラデシュにおける私たちの活動・取り組みは、障害のメインストリーム化を進めるように開発アクター(NGO)に関心を持たせることです。これで、様々なりハビ

アクセシビリティ(利便性)



(写真2)

権利擁護活動とネットワークの構築



(写真3)

障害の社会主流化(メインストリーミング)活動、アジア版ノーベル賞であるマグサイサイ賞を受賞



(写真4)

リテーションのサービスが障害をもっている人たちの近くに届けられるようになりました。障害をもった人自身やグループ、団体が、スキルを持ち、組織づくりをし、自分たちの声をあげて問題提起をするようになりました。

NGO との連携

NGO との連携の成果として挙げられるのは、まず 1 つ目は NGO が活動対象グループに、障害をもつ人たちを含めるようになったということです。それから、建物は、少なくとも 1 階は車椅子でも入れるようになってきています。障害をもっている人たちが NGO のスタッフとして働くようにもなりました。また NGO 自身が自分たちの方針として障害をもった人たちをインクルージョンすることを制度化して規約に入れているところもあります。このような団体は開発団体として教育委員会、就労委員会などの委員になっており、障害についてすでに十分鋭敏化されていることから、委員会に出席するときは基本的には障害のインクルージョンを提唱しています。

また、NGO の所に障害をもつ人たちがやって来て、自分たちの意見を述べ、それを NGO 側がマニュアルに取り入れることもあります。NGO は更に地方自治体に働きかけて、「地方自治体は地域の開発計画の立案と実施に責任をもっているのだから、そこに障害を含めてください」と申し入れをしています。

国際的な団体が関心を示しています。時間の関係で個々の詳しいことはお話しできませんが、国内には少なくとも 300 の団体があり、その多くがインクルージョンの取り組みをしています。NGO の連合体もあります。私たちは食糧安全保障の課題に取り組む連合体の一員です。メインストリームの食糧安全保障の団体がプロジェクトを実施していますが、そこに障害のインクルージョンを図るようにと技術的な支援を提供しています。その連合体は 4 万の女性のグループに働きかけていますが、そのうちの 5000 グループは障害をもった人たちを含まなければならないとしています。例えば BRAC（ブラック）など大型 NGO も関心を持つようになっていきますし、地方行政についてはすでに申し上げました。またいくつかの省庁にも動きが見られます。それからワールドビジョン、カリタスなど、大きな国際 NGO も関心を示しています。CBR の一環として大変すばらしいプロジェクトがあって、中央政府、地方自治体、障害者団体、NGO がこのプロジェクトを実施しようとしています。

学んだこと

最後に私たちが得た教訓（図 6）をお話ししたいと思います。まず、能力構築は非常に重要です。また、メインストリーム化とは完全な組織変革を意味します。変化のペースは遅々としているので、忍耐強くなる必要があります。

それから、様々な機関と連携すること、利用可能な資源を活用することが重要です。組織には多くの人がありますが、その中で一番関心をもって動いてくれそう人を見つけ

重要な学び

- 自らの能力を磨く — 有言実行
- 主流化は組織変革の過程
- 遅々とした変革過程だが、忍耐が肝要で、無理して急いではならない。徐々にほのめかすように。
- 各組織は、それぞれ独立した存在であり、独自のベースと変化の過程がある - それを尊重すること！
- 彼らの「懸念要素」と「既存負荷」を肝に銘じておくこと。
- 関係を作り、提携関係を構築する — 利用可能な資源を使用する。

（図 6）

てその人を支援し、協力し合うのはとても重要です。

最後に、重要なのは、何を行うにしても、障害をもつ人を計画に含めること、プロセスに含めること、そして彼らの声に耳を傾けることです。全体の状況について一番よい判断をし、障害のインクルージョンのプロセスについて適切なアドバイスができるのは、障害をもっている人たちです。

今お話ししたのは、組織内の画期的な変革のサイクルについて私たちが考えていることについてでしたが、実施のプロセスについては時間がないのでここで終わりにしたいと思います。これに関心がおありの方は後程お声をかけてください。それから個別に必要なものがあれば、おっしゃっていただければ、eメールを送るなどの対応をすることもできます。

3つの重要な要素

私たちは障害をもつ人たちや多様な人たちを含めた包摂的な社会、インクルーシブな社会を目指しています。そのためには今からお話する3つの要素が不可欠です。まず1つはメインストリーム化です。これは社会の中にある様々な障壁を取り除いていくことです。2つ目はリハビリテーションです。障害をもった人たちは多様なニーズがあり、技術的な支援を必要としますが、これを提供することです。3つ目がエンパワメントです。障害をもつ人たち、あるいは家族の人たちを組織化し、その人たちの能力を向上させ、彼らが様々な意思決定に関与できるようにするためにはエンパワメントが必要です。

障害者の人々と協力し合うことにより、すべての人々のためのインクルーシブな社会を作ることができる。



(写真5)

Centre for
Disability in
Development
Strengthening People, Markets and Resilience in the

私たちが信じていることを最後にお話したいと思います。障害をもつ人たちと手を取り合うことによって、全ての人たちのためのインクルーシブな社会を作ることができると思っています(写真5)。

忍耐強く聞いていただいてありがとうございました。ぜひ私たちのウェブサイトに来ていただいて、詳しくご覧いただければと思います。

上野 バリさん、本当にありがとうございました。力強いメッセージを私たちは受け取ることができたと思います。それではこれで午前の部を終えたいと思います。バリさんと通訳をしてくださった林さんに大きな拍手をお願いいたします。

プレゼンテーション2

「日本の状況を CBR マトリックスで見てもよう。」

発表①：社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわり理事長

戸枝 陽基

発表②：一般社団法人草の根ささえあい代表理事

渡辺 ゆりか

コメンテーター：ナズムル・バリ

◆午後の進行

上野 午後の部を始めたいと思います。発表者からお話をお聞きする前に、CBR マトリックス表をご覧ください。1 枚目が私の人生の充足度、2 枚目はバリさんのお話しをお聞きしながらチェックしていただきました。3 枚目には私の事業・取り組みと書いてあります。これからの時間は戸枝陽基さんと渡辺ゆりかさんのお話しをお聞きし、ナズムル・バリさんからはコメントをそれぞれいただきながら進めていきます。その後、休憩があり、3 つのグループに分かれます。皆さんの活動に関してマトリックス表に当てはめていただきます。お書きいただいたものは皆さんの自己紹介ということになります。何かわかりにくいところがありますか。大丈夫そうですね。

発表①：戸枝 陽基 （社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわり理事長）

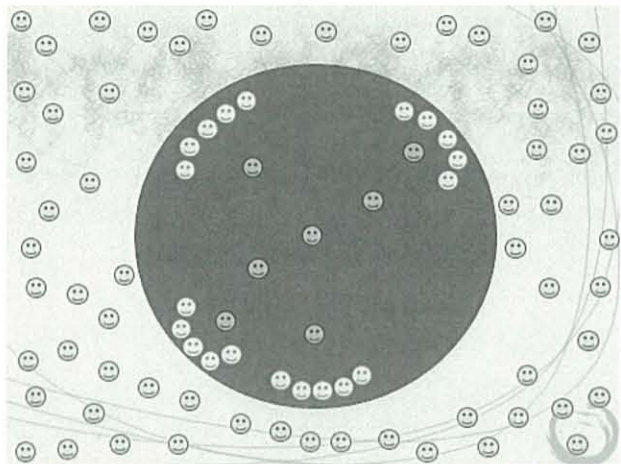
上野 それではお一人目の発表者、社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわりの理事長をされています戸枝陽基さんをお迎えいたします。30 分間お話しをお聞きし、その後にナズムル・バリさんから 10 分間コメントをいただきます。戸枝さん、どうぞよろしくお願いします。

戸枝 こんにちは、戸枝です。よろしくお願いします。障害のある方の地域生活を支えるということで半田市を中心に、周辺の 10 自治体、人口 59 万人のエリアを対象に活動しています。昨日はバリさんにうちの活動を見ていただいたのですが、同じようなイメージを皆さんにもっていただけるようにプレゼンテーションをしていきたいと思います。パンフレットもご用意していますので、こちらも参照していただければと思います。

むそうの目指すもの

今のまま福祉をチェンジしなければ、僕たちもプライドや大事にしてきた自分なりの文化、個性など、いろいろなものを否定されながら死んでいくしかありません。これは明日、自分が障害者になったとしても同様です。僕自身は嫌だと強く思っているの、具体的に自分の能力の範囲内で精一杯チェンジしようとしているところです。理念としてはノーマライゼーションを目指しています。共感してくれた若いスタッフたちが集まり、活動しているのがむそうです。今は愛知と東京に事業所があり、愛知は常勤の職員が 20 名、常勤パートがほぼ同数、登録ヘルパーが約 80 名ぐらいいます。東京には 10 名ほどのスタッフがいます。事業規模としては今年の予算でいえば 4 億円ちょっとぐらいです。

僕たちが何をを目指しているのかをお話します。オレンジ色の丸が施設で、障害のある方、担当職員がいるとします（図 1）。日本の施設の場合、グループホーム・ケアホームでは 5 人の利用者に対し、1 人の夜勤が付きます。日中活動は 5 人から 7 人の利用者に対し、1 人



（図 1）

の職員が付きます。真ん中にいるのが施設長です。何をしているのかよくわからない、主任もいます。施設には必ずいます。利用者の個別の暮らしや希望も支援してくださいという、このように人手が足りないの、無理だと皆さん半笑いになります。人手が足りないのであれば、何をしているのかよくわからない人を取りあえずリストラして、そのお金で地域の中でパートタイムで働きたいという方を雇用すればいい。

施設は国のお金をいただいて建てたこともあり、もったいないので、うちの場合はラーメン屋にしました。ラーメン屋には、障害のある方が働き、そこには職員やパートタイムの方もいます。お客さんも来ます。他には、鶏を飼っているグループ、シイタケを育てているグループもあります。竹を粉碎し、固形燃料を作るプロジェクトもしています。今日は滋賀県の東近江の方たちが来ていますが、東近江では雑木林の木を伐り出し、それを障害のある方が薪割りして宅配するというプロジェクトをやっています。それを見た時にこれは素晴らしいなと思いました。エネルギーの問題にもアプローチしているし、山の持ち主はお年寄りが多いので、手を入れることができず荒れてしまっています。大雨が降ると海に木材が流れ着くことがありますが、それは山が死にかけているからです。

知多には常滑という陶芸で有名なところがありますが、その窯に、戦後の経済成長期に知多中の木をくべてしまったということがありました。鎌倉時代にも一度全部焼いてしまったことがあるらしいです。だから木が生えてないのです。木は生えていないのですが、そこに竹がものすごく伸びてしまい困っています。今は竹を粉碎してエネルギーにするというプロジェクトに取り組んでいます。この人たちは農地を借りて活動しています。小屋も建てました。そうすると本体施設はがらんとするので、地域の方たちに会議で使っていただいたり、ラーメン屋なのでお食事に来ていただいたり、コミュニティスペースとして機能しています。こうしたことをやっています。

地域の人たちも以前は、障害のある人はおっかない、どうやって付き合ったらいいのかわからない

と思っていたのですが、思いのほか愉快的な人たちだということがわかり、いろんな人が寄ってくるようになりました。去年の忘年会には 130 人ぐらい集まりました。僕は受付の所に立ち、お一人お一人にご挨拶していきます。すると職員たちが「あの人はシイタケの菌床栽培の指導をしてくださっている方です。戸枝さん、お礼言わないとだめです」とずっとレクチャーしてくれるのですね。わかった、わかったと言いながら、米搗バツタのようにご挨拶をして回りました。そのような感じで、いろんな人がいる訳です。

入所型施設も地域の人たちを雇用しているかもしれないですが、福祉の専門家でないような人が参加しているということは少ないです。ネットワークをつくるのにはここが重要だと考えています。この輪ができてくると、自閉症で水にこだわりがある方でも、洗い物が上手だということであればうちの喫茶店で働かないか、ということで就労につながっていく場合もあります。

今考えているのは、子供が独立していった老夫婦の家庭に、ある程度自立度のあるご本人さんがホームステイのようにお世話になるというグループホーム・ケアホームです。家賃を払ってもいいし、この老夫婦が食事を出してくれるのであれば介護報酬を払ってもいい訳です。夫婦世帯では年金がほしい 15 万円ぐらいです。旅行などして豊かな暮らしをするとすると、25 万円ぐらい欲しいというのがいろいろなデータで出てきます。障害のある方を一人みってくると 10 万円ぐらい払うことは可能です。障害のあるご本人の中には携帯電話を使える人もいるので、老夫婦の病気の急変に気づき、通報することもできるかもしれません。ボタンを押したら連絡が届くような緊急通報システムを考えてみていいでしょう。僕たちむさうの職員は、障害のある人とともに、老夫婦の支援もできないかというふうに思っています。

福祉コストの最大化

福祉のコストをどうやって最大化していくのか。無縁社会については湯浅誠さんという方が警鐘を鳴らしていますが、直接サービスの対象にはならない、見守りが必要な人たちがどんどん増えてきています。その時に、僕たちは障害者福祉をやっているので障害者しか見ないのではなく、こうして最大化していくこともできるのではないかという戦略も考えています。

知多半島のアパートでは、マンションほど大きくないので、清掃会社が受託しないというところがあります。そうしたアパートに週 2 回出向き、きれいにお掃除し、電球が切れていたら交換するという仕事を障害のある方が始めています。大家さんはお年を取られ、自分でやるのはおっくうなので、月 5000 円でどうかと頼まれます。あとはコミュニティセンターの清掃をさせていただいたりもしています。集団でということも徐々に押し出し始めています。企業で就労できる方たちは一般就労をしてもらっていますが、当然続かないこともあるので、何かあった時にはすぐに戻って来てもいいという安心感を担保しています。そうすると親御さんたちも怖がらずにアプローチできる訳です。

むそうの 10 のサービス



(図 2)

むそうでは 10 のサービスを提供しています (図 2)。特に基本的な支援ということでは、7 日間親が亡くなっても地域に残れる住まいがあって、5 日間頑張る場所があって、2 日間はヘルパーさんと一緒に社会参加することです。だんだんうちのメンバーも年を取ってきています。ダウン症の方は 40 歳を過ぎるとかなりしんどくなってきますので、外出支援で健康風呂に行き、マッサージを受けるということもあります。あとは外に出たくないという時には家事援助のヘルパーを派遣するなどして支えています。

更に暮らしを包み込む支援ということでは、所得の問題、親御さんが亡くなった後の年金管理、福祉サービスを誰が担うか、医療との連携、家族援助ということが挙げられます。特に子供に障害があるとわかった若い親御さんに、障害の見立てをきちんとし、家庭の中での暮らしの組み立てを一緒にしていくという支援がいるのではないかと思います。僕らはそれを療育ヘルパーと呼んでいます。

レスパイトも必要です。レスパイトで重要だと思うのは、障害のない兄弟たちが親御さんにべったりと愛情を注がれることです。これを担保していかなければなりません。障害のない兄弟は親よりも長くご本人と伴走してくれるのです。例えば、胃に管を入れないといけない場合、手術の同意を誰がするのか。兄弟がいるというのはすごく重要です。しかし、その兄弟が障害のある兄弟がいるために割り引かれたと思っていると、協力的な関係にはなりません。家族ということでは特に兄弟を大事に支援しないといけないと思います。

これらのサービスを組み合わせてくれるのが相談支援事業です。これが今すごく困っています。うちのまちの相談支援員の中には、ご本人に大量のサービスを取ることが相談員の腕だという考えがあるようですが、サービス漬けになるというのは専門家としか会わない、貧弱な暮らしに内包されていくということです。だからいろいろな社会資源とつないでくれるような相談支援をしないといけません。今はむそう独自で相談支援をし始めています。

地域支援計画ということでは、プロ野球で活躍された元中日ドラゴンズの立浪さんをお呼びしてイベントを開催しました。福祉講演会に来る人というのはもともと理解者なので、全く違う切り口で来た人に福祉を伝えないと意味がない訳です。そんな活動も地道にやっています。あとは人材養成が一番大事だと思いますが、人づくりを一生懸命やることです。今までは箱で障害のある方を守るという概念でいましたが、僕たちは人の質で守ろうとしています。この 10 のサービスで障害のある方を支えたいのではないかと思います。これが僕たちの提案です。

先日、琉球大学で CBR の勉強会に参加させていただいた時に、この 10 のサービスを 15 年前に一人でひらめいた俺は天才ではないかといいましたところ、笑われるかと思ったら皆さんすごい顔でう

なずいていました。すかさず Thank you と言っておきました。僕らはこのターゲットに対してどうやって事業展開するのかを 15 年前からしてきました。だから CBR マトリックスを見た時は、一つ一つの項目がより高いレベルで練り込まれていて、僕たちの足りない視点も補ってくださっており、これを考えた人は賢いなと思いました。

CBR マトリックスで気づかされたこと

CBR マトリックスの中の、例えば医療というところでは、医療は医者がすることと考え、具体的なアプローチをしてきませんでした。CBR マトリックスを見て、やはり医療との連携は具体的にしていかなければ駄目だろうと思いました。特に満足のいく医療機関、場合によっては医療人材と本当に出会っているのかと思うとそれはノーということでした。そうすると自分たちでそれができるぐらいの力強さと知識を持たなければいけないのではないかと悶々としていた時に、東京のあるドクターと出会って紹介された人がいます。写真(図 3)の彼女は、胃ろうという胃のチューブから流動食を入れています。要するにミルクを自分で飲むという力が生まれた時になかったという方です。

こうした子供たちは医療的に治療や手術をすることがなくなると、

健康になったと言って病院を出されてしまいます。その際に介護職の人たちは管が付い

ているので医療職の担当だと言って面倒を見ない。医療職の人たちは既に胃ろうの造営手術が終わり、手を施すことがないので医療の対象ではないといひます。彼女はその谷間にいました。父子家庭だったので、お父さんが会社に連れていき、職場にベビーベッドを置いてそこに寝かせていました。彼女は今 3 歳で、そういう暮らしを 3 年間していたそうです。在宅診療所と訪問看護ステーションとむそうが連携し、彼女の暮らしの支援をしています。彼女は今、墨田区にある拠点に来ています。

東京には世田谷にも拠点を作り、立川でもドクターと連携しながら進めていこうと準備しているところです。医療的なケアが必要な子供たちというのは移動力がすごく弱いので、東京中に 30 分以内で来られるような拠点を作っていき、同じような動きをしてくれる他の法人などにノウハウを提供しながら、この問題を解決していきたいと思っています。こうしたアクションにつながったのも CBR マトリックスのおかげです。むそうでは事業所の展開診断ツールとして有用だったといえるかと思ひます。



(図 3)

愛知での取り組み

これ(写真1)は愛知での展開です。昨日、バリさんから「マッシュルーム アンド バンブー ナイス」と言われました。バングラデシュでもすぐにやりたいとおっしゃっていました。アジアでならどこでもやれるかと思います。知多でも医療法人や権利擁護センターなどとも連携しながら、冒頭にご覧いただいたような入所型施設に、重度障害者であっても、親が亡くなったとしても行かないということが実現しています。

むそうの活動を見て、いろいろな方から CBR のアジア・アフリカなどでの展開にすごく似ていると言っていていただいています。僕たちは建物に依存せずに来てきていますので、そういう意味では似ているのかなという気はしています。住む、働く、社会参加の仕組みです。シイタケ栽培、鶏舎もあります。先ほどもお話ししました竹を粉碎し、ペレットにしているところ(写真2)です。シイタケというのはおがくずを固めたところから出てくるのですが、このおがくずに竹を混ぜてもシイタケは出てくるということがわかりました。おがくずの原材料として竹が使えるということもわかってきました。

知多中が竹林になってしまうことを食い止めることも含め、それを僕たちが実現できれば障害のある方たちのおかげでとなる訳で、障害のある方たちの社会的価値もぐんと上がります。そういう意味で、儲かる・儲からないということも当然大事なのですが、社会性の高い、公益性の高い仕事を選んで取り組んでいきたいと思っています。



(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真4)

廃園になった保育園が空いていたので地域の人たちが集まる喫茶店(写真3)にしました。これ(写真4)はリハビリ専門の病院の中にある喫茶店です。障害のある方が生き生きと働いていれば、リハ



(図 4)



(図 5)



(図 6)



(図 7)

ビリに来ている人ももう一度頑張ろうと思うのではないかと
いうことで、病院の院長先生から家賃は要らないので来てほ
しいと言われて始めました。うちのメンバーの手を取って、
私も負けないからねとおっしゃる方もいらっしゃいます。こ
ういう仕事は障害福祉でなければできないと思います。

親子関係が元で不安定になっている自閉症・精神障害の方
たちというのは、僕たちも支援に苦労しています。住環境か
ら全て一度リセットしないと立ち直ることができない人が多
いです。

駅前の証券会社だったビルを改修し、住まいにして、自立
生活をしていただいています(図 4)。

これ(図 5)は会社の社員寮だった所をケアホームと支援
センターに改修しました。

これ(図 6)は一軒家で、1階が4部屋、2階が4部屋の
ケアホームです。

これ(図 7)はガレージだった所はバリアフリー改修し、
リフト付きのケアホームにしました。身体的な障害のある方
の場合にはこうした環境を作らなければいけません。今はケ
アホームを次々に作って、親御さんがいなくなっても受け止
められる仕組みを整えています。ここで皆さん暮らされて、
昼間の活動に行かれています。土(図 4)と一緒に好き
なことをして過ごす、そんな生活をしています。

むそうの活動の特徴

まとめということで、民間のあき空間の再活用、事業継承、公共のあきインフラの再活用、リハビ
リ支援、新たな社会課題の解決といったことがむそうの活動の特徴ではないかと思っています。事業
継承ということでは、例えばシイタケ栽培は経営者の方が年を取ったので辞めるということで、道具
や販路などを全部いただきました。その方は週5日やるのは大変だから辞めるとおっしゃっていたの
で、では週3日教えに来てくださいますようお願いし、若い職員を雇って技術継承しています。ほうって
おくと失われてしまう仕事を障害のある方と職員が継承するというパターンは結構ありではないかと思
っています。

むそうとしては税金を使わせてもらっているのです、経済効果が最大化することを意識しています。自分のところにお金が留まるのではなく、いろいろな所と連携することを丁寧に仕掛けていくことです。例えば夕飯は自分のところで作ってもいいのですが、できれば地元のお弁当屋さんをお願いしています。そうするとそこにお金が流れます。むそうや障害のある方がいなくなるとお店の報酬が減るということで、いろいろな人に影響を与えるようになります。そうすると役所への反対運動が起こったりする訳です。これを当事者だけが言っているのではやはり弱いです。これからは厳しいと思います。

福祉サービスを構成する3つの要素

冒頭から人材づくりが一番大事だといってきましたが、僕自身は福祉サービスというのは3つの要素（図8）で構成されていると思っています。1つは介護スキルです。特に障害の理解力と書きましたが、この人の発達の状態はどれぐらいのところにあるのか、更には障害特性の正しい見立てが欠かせません。例えば就労ということでは、やれることを見出すのはやはり難しい訳です。住まいの場所も、例えば光に対する反応が過剰で夏になると不眠になってイライラしてしまう人というのは、自閉症の方の中にすごく多くいらっしゃいます。そういう方の場合には、外側だけでなく、中側にも雨戸を付けます。そうすると真っ暗になり、それを開けない限り8時までちゃんと寝ています。そうした配慮をしないと4時半ぐらいに起きてしまい、寝るのは遅くなるので睡眠不足で夏はイライラする訳です。

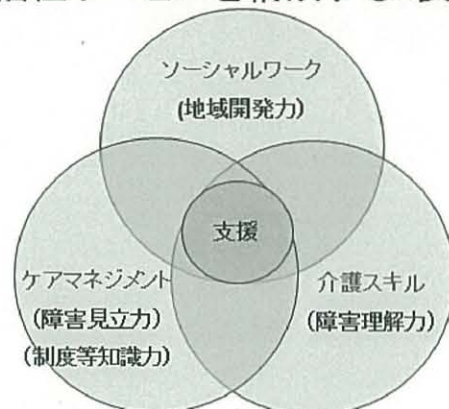
こうした見立てができるようになるためには、やはり障害のある方と一緒に暮らすということを10年ぐらい丁寧にやらないと駄目なのではないかと思っています。うちにも相談支援員ならやってもいいですという高飛車な大学生が採用試験に大勢来ますが、ジャージを履いて、オムツをかえて、ウンコをつかむということができないなら無理ですと言って、入り口で落とします。それができた人がこの人を幸せにするにはただ自分が頑張っているだけではなく、たくさんの人と協働しなくてはいけない、使える制度を知らないといけない、制度外にいろいろな社会資源はないだろうか意識を伸ばしていく中で、ケアマネジメントや相談支援ができるようになってきます。

相談支援をやっていると、こんな社会資源があったらいいのにな、制度がもう少しこういうふうに変わればいいのにな、ということに気づく訳です。それを作ってしまうというのがソーシャルワークだと思っています。それぞれの専門性を持った人がチームでやってもいいのですが、できればこの3つがきちんと積み重なった人材がたくさん出てくると日本ももっともっと変わるし、場合によってはアジアの方たちと貢献的に付き合い、学ばせてもらうようなプロの地域福祉人が日本の中で出てくるのではないかと思います。それをまずはむそうでつくれるように頑張りたいと思います。

以上で報告を終わります。

上野 戸枝さん、どうもありがとうございました。

福祉サービスを構成する3要素



(図8)

バリ ご発表、どうもありがとうございます。昨日、実際に半田のむそうを見学させていただきました。とても印象的な事がありました。

最初に生計手段のプログラムを見ました。とても面白いと思いましたし、学べると感じたこともありました。様々な障害をもった人たちが従事していると同時に地域の人たちも一緒にそれを行っている、ということが一つです。地域の高齢の方が障害をもった人たちを手助けしていましたが、そのような姿を実際にコミュニティの他の人たちにはっきりと示すことは大変重要だと思います。障害をもった人たちを支援するという一方通行ではなく、地域の人たちとお互いに支え合いができることが重要だと思います。

このような活動は非常に重要です。障害をもった人たちも収入が得られるようになりますし、自分たちがやっている仕事なんだというオーナーシップ（当事者意識）もそこに帰属しているという意識も生まれて、満足に思い、かつ、やる気も出てきます。もちろん、社会の中でのインクルージョンにもつながってきます。このような活動がコミュニティの中心部で行われているということが非常に重要です。シイタケ栽培もすごく面白いと思いました。バングラデシュでもやりたいと思いました。いろいろな野菜の栽培も見ました。バングラデシュと同じものもいくつかありました。

もう一点私が非常に高く評価するのは、CBR のプログラムは世界各地で様々見てきましたが、むそうでは重度の障害をもった人のみを対象としているのではなく、知的障害や精神障害をもっている人も一緒に参加しているという事です。

健康面でのケアに関する支援が、施設内だけではなくそれぞれの家庭でも、様々な時間帯で夜も昼も提供されていました。今日のバングラデシュでは資源が不足しているので、同じことが必ずしも実現可能ではありません。資金的には地方自治体である県がコストの 75% をカバーしているとお聞きしました。バングラデシュでは将来に希望を託したいと思います。

CBR マトリックスに当てはめると様々な要素がむそうの活動の中でカバーされていることがわかります。私がお話した CBR にとっての 3 つの大きな要素であるリハビリテーション、社会的インクルージョン・地域への働きかけ、障害をもった人たちに機会を与えてエンパワメントを図る、その 3 つともが含まれています。今後の課題は、このようなニーズを持つ、より多くの障害のある人にどう対応していくかということでしょう。

昨日の視察で拝見したこと、そして今日のお話からいろいろと学んだことを国に持ち帰りたいと思います。今後ご成功をお祈りします。ありがとうございました。

発表②：渡辺 ゆりか （一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事）

上野 一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトの代表理事をされています渡辺ゆりかさんをお迎えいたします。

渡辺 皆さん、こんにちは。一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトで代表理事を務めています渡辺と申します。どうぞよろしくお願いいたします。1 週間ほど前に不覚にも風邪をひいてしまい、かなりの鼻声でお聞き苦しいかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

草の根ささえあいプロジェクトは法人化して1年少しの新しい団体です。戸枝さんのような地域に根差した取り組みというのはまだまだこれからというところですが、今日は CBR マトリックスを使って、私たちの試行錯誤のチャレンジを発表したいと思います。どうぞお付き合いいただければと思います。

草の根ささえあいプロジェクトの概要

私たちは平成 23 年 4 月 23 日に任意団体として発足しました。去年の 4 月 27 日に一般社団法人となりました。本当にまだ生まれたての新しい団体です。名古屋市内に小さな事務所を構えて活動しています。

メンバーは様々です。例えば障害のある人の施設で働いていたり、行政の母子家庭の相談窓口にいたり、ホームレスの支援など、支援の仕事を持った者が出来ることを持ち寄って、仕事以外のところで、貧困、暴力、自殺など、あらゆる悩みや困難を抱えて孤立に陥っている人たちを何とか応援しようということで活動しています。

メンバーは 86 人です。写真（写真 1）を見ていただくとすごく楽しそうで、なんだか順調そうに見えるのですが、実は私たち悶々としています。世の中には福祉サービスというものがありますが、その制度と制度の狭間で、誰の助けや応援も届かず、複数の困りごとを抱えている方がいらっしゃいます。それらの方を自分たちの支援現場や近所、地域の中でどのように支えていくのか。その答えがわからずに、悶々と勉強会を始めたところからこの活動はスタートしました。

平成23年4月23日 発足 プロジェクトメンバー総計:86名
平成24年4月27日 一般社団法人取得



（写真 1）

「穴にいる人」

私は 5 年前に起業支援ネットの主催する起業の学校を卒業しました。そして 2010 年に戸枝さんが

開催されたふわりんクルージョンというイベントで湯浅誠さんと出会いました。私たちが日々考えていた、制度と制度の狭間にいて誰の応援の手も届かない人たちのことを、湯浅さんは「穴にいる人」と表現し、「穴にいる人」のことを考える分科会をされていました。私はその分科会に参加し、これは分科会で終わらせてしまうのではなく、継続して考えていきたいということで皆さんに呼びかけて始まったのが「穴を見つける会」です。草の根ささえあいプロジェクトはこの「穴を見つける会」からスタートしています。ですので、先ほどご登壇された戸枝さんとファシリテーターをされていた起業支援ネットの鈴木さんは、草の根ささえあいプロジェクトの生みの親ということになります。それもあって緊張しながら話をさせていただいています。

ふわりんクルージョンの分科会では、湯浅さんが「穴にいる人」というのはどんな人かを書き出すワークをしたのですが、その時にははじめはみんな書くことができませんでした。皆さんは思い浮かぶでしょうか。ワークラベルを書くのに戸惑っていた時に、湯浅さんは「じゃあわかりました、質問を変えます。あなたたちの身の回りに、わかってるんだけど仕方がないと放置されている人はいませんか」とおっしゃられました。そうすると支援現場のメンバーは次々と書き出していきました。あの人のこと、この人のことということで、具体的な人物が浮かんできたのです。

自分のところのサービスでは彼らの困りごとを全部解決できず放置してしまっている人、あるいは来てもらってもなかなかコミュニケーションが取りづらく、すぐ怒って帰ってしまう人。そうしたちょっと面倒だねといわれているような人たちのことを私たちはわかっているのに、仕方がないと言ってしまっている。その「わかっているんだけど仕方がないよね」という言葉を言わずにいこう、言わなくて済む方法をみんなで摸索しようということで、今も日々試行錯誤しているところです。

草の根ささえあいプロジェクトの事業

草の根ささえあいプロジェクトの事業を紹介します。「寄り添いホットライン」は、24時間365日の何でも電話相談です。今日も動いています。「今から死にます」というお電話があったり、「30円しかお金がないのですが明日からどうやって暮らしていけばいいですか」、という相談があったり、「入れ歯がないのだけどどこにあるか知りませんか」、というお電話があったりします。悩み事は様々ですが、共通しているのは、皆さん孤立しているということです。入れ歯がないという方も、入れ歯をなくしたということを寄り添いホットラインにしか言えないからお電話をしている訳です。日常で困難を抱えながら、それがケアされず、一人ぼっちで解決の手立てが見つからないという人からお電話をいただいています。

「子ども・若者総合相談センター」は先月6月25日に名古屋市の委託を受けてオープンしました。貧困に陥っていくプロセスの中で、誰にも手立てを打ってもらえなかった人たちに対し、もっと早期にアプローチしたい。不登校や引きこもり、あるいは家庭内で暴力が始まる前に相談してもらおう、ということで活動しています。

「寄り添いホットライン」、「子ども・若者総合相談センター」はいずれも問題解決型の事業です。お電話を聞いて終わるのではなく、困っている方々を地域の支援機関につなげ直すという役割を担っています。

社会で孤立している方は、社会資源が見つからないような多様で複雑な困りごとを抱えていたり、あるいはいろいろな人に無視され続けてきた結果、そうしたものを頼るのは嫌だということになかな

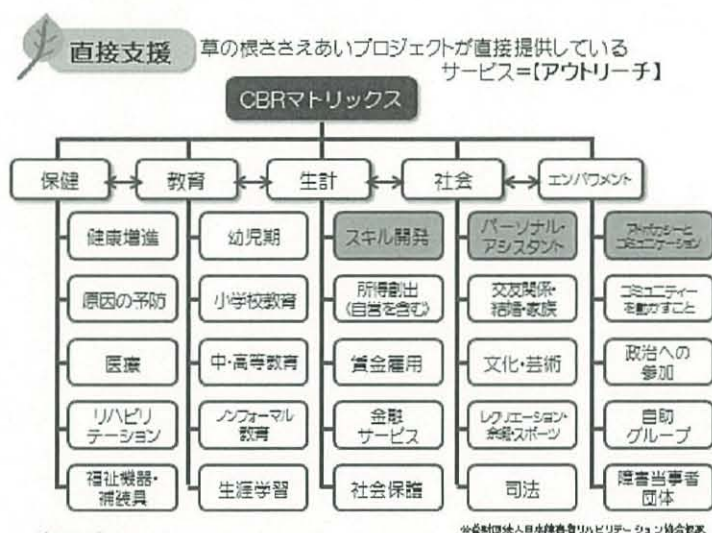
か制度に乗ってくれません。そうした制度に乗らなかった人たちを、地域の支援者のできることの持ち寄りで、重複した困り事を複数の支援者のネットワークで解決しようというのが「インフォーマルネットワーク」です。

そこでも解決できないような「穴」に対しては、「猫の手バンク」という困りごとさえあいバンクで対応しています。これは制度に乗らない身近な生活面での困りごとをご本人の生活圈まで出向いて、同行訪問する取り組みです。例えば部屋が散らかり過ぎてごみ屋敷になって困っていると言われれば、一緒にお掃除をします。単身で入院するんだけど誰もお見舞いに来てくれないと言われれば、ちゃんとお見舞いに行きます。そういうような寄り添い支援をしています。

CBR マトリックスと「猫の手バンク」

今から私たちがメインでやっていて一番特徴的な「猫の手バンク」を、CBR マトリックスに当てはめてみたらどうなるのかということをご覧いただきたいと思います。皆さんのお手元にご自身の事業や取り組みについて書いてみようという CBR マトリックスの用紙があるかと思いますが、自分ならどうするだろうかと考えながら聞いていただけると嬉しいです。

私たちは「猫の手バンク」でできていることを書き出してみたところ、あ然とするほど少ないことが



(図 1)

がわかりました(図 1)。アドボカシーとコミュニケーション、パーソナル・アシスタント、スキル開発の3つしか埋まらないのです。私たちはパーソナル・アシスタントは大前提だと考えています。ご本人の困りごとを中心として、ご本人を主体として、そこに出向いて行くということをしています。そうすると、ご本人は制度に乗ること、乗らないこと、様々な困りごとを語ってくれます。

ただ、私たちのもとに相談に来る方は、先ほどもお伝えしたように、孤立が長い方が多いので、社会とコミュニケーションを取るのがあまり上手ではありません。なので、私たちはそうしたコミュニケーションの仲介役をしています。ご本人の困りごとにも一緒に仲介します。その困りごとは自分のせいではなく、こういう特性からきているので、こういう支援機関を頼るといいというようなことをお伝えし、コミュニケーションによって社会とつなげる役割をしています。その中で私たちが何気なく身につけている日常のやり取りをスキルとして開発しています。この3つをやっているだけだというのが、CBR マトリックスをやってみてすごく面白かったところです。

パーソナル・アシスタントとしてご本人のおうちに出向いて行き、ご本人の困りごとをお聞きするということは、ご本人を中心にして支援をアレンジするので、たくさんの社会資源が必要になります。私たちはそれをどうしているかというと、それぞれの支援機関や支援者のもとにご本人と一緒に出向いて行き、ご本人と支援者との間をつなぐ仲介をしている—ということが、CBR マトリックスからわ

かりました。

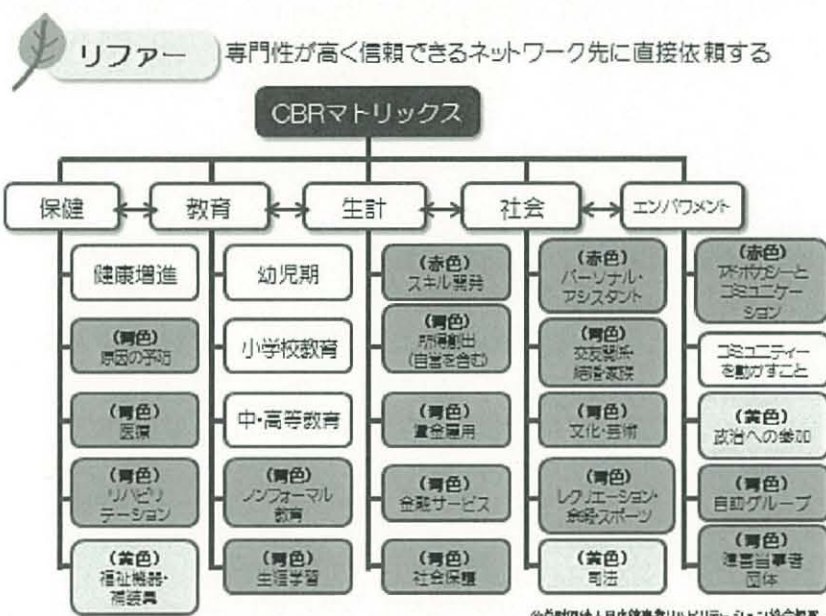
例えば、医療ということでは、ドクターとケンカをして病院に行かなくなってしまった人に対しては、どうしてケンカをしたのかをお聞きし、ドクターの説明がわかりにくければそれを要約したりもします。あるいは、自分が眠れないことを言えずにずっと同じお薬を飲んでいて、眠れない期間が長期化してきた方には、ご本人のことを代弁して差し上げます。

社会保障のところでは、生活保護の窓口と一緒に出向くなどしています。「生活保護が駄目だということでご我慢していたら、所持金が 30 円になってしまいました。ご飯は 3 日間食べていません。この方は 40 歳で若くて健康に見えますが、実はこんな生きづらさを抱え、とてもメンタル不調でいます。半年ぐらいお休みをいただければ就職活動を再スタートできます」、というふうに仲介し、生活保護等につなげています。

青色(図 2)は支援機関とご本人と我々の 3 者のチームで取り組んでいるものですが、黄色はリファーマたちは呼んでいるものです。1~2 回おつなぎしたら後はお任せするという項目です。

政治への参加、司法に黄色(図 2)が付いていますが、例えば娘さんの学校のいじめ問題で先生の対応が納得できないという時には、弁護団を立ち上げて、学校に第三者委員会を入れるといった案件も

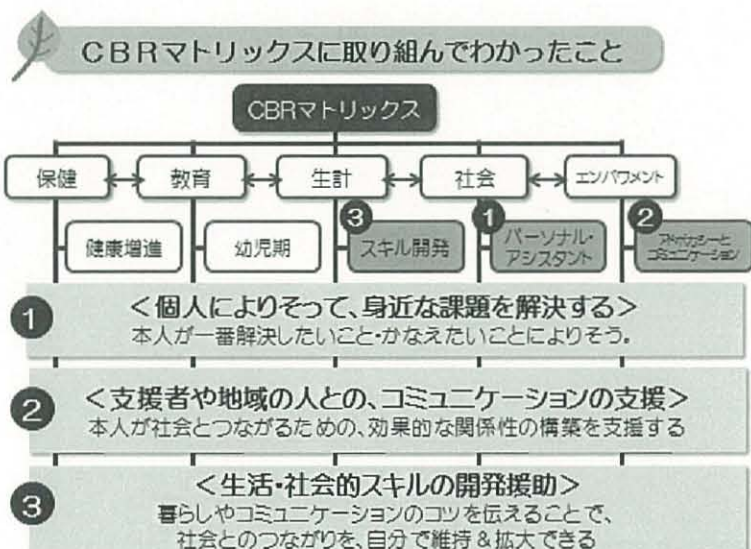
出てきています。弁護士さんのもとに我々が同行してご本人のお悩みは伝えますが、弁護団が立ち上がった後はお任せします。専門性にお任せするパターンです。



(図 2)

CBR マトリックスに取り組んでわかったこと

これら(図 1、図 2)を見ていただくと、私たちは 3 つの赤色の部分しかしていませんが、その他の部分もまあまあ埋まっていることがわかります。今回、CBR マトリックスに取り組んでみて大発見なこと(図 3)でした。ご本人の身近な課題を解決するためには、まずはご本人が一番したいこと、かなえたいことに駆けつけ寄り添う



(図 3)

ことです。ごみを掃除する、一緒にお買い物に行く、お話し相手になるなどです。

次にしていることは、支援者や地域の人たちとのコミュニケーションの支援です。先ほどもお伝えしましたが、ご本人が社会に上手につながれないが故に今まで孤立に陥っているの、支援機関に行き来してくださいとか、こういう工夫をするといいい、ということだけでは駄目です。本人が社会とつながるための効果的な関係性を探り、私たちが工夫しながらつなぐ支援をしていくことです。

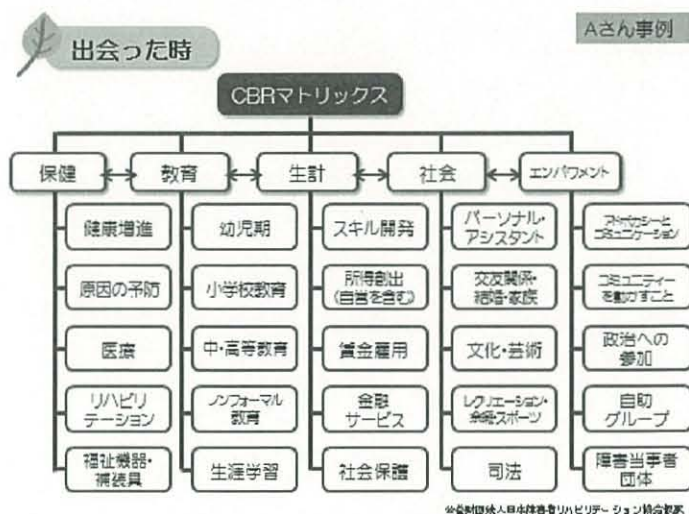
最後にスキル開発です。ごみ屋敷になってしまう人はまたごみ屋敷にならないように、例えばものを捨てられないという特性があるのだとしたら、捨てるか捨てられないかの判断ができないものは箱に入れておいて、1ヵ月後に捨てるか捨てないかをみんなで話し合おうということをしてみたいと思っています。不安になると何十回も他人に電話をしてしまうという人は、それだけで人に嫌われてしまいます。すごくいい方なのにもったいないので、携帯メールの使い方を教えて差し上げました。1日に1本、「こういう要件がある」とか「寂しいんだ」というふうにメールをすれば、そのメールは必ず返ってくるということをお伝えします。暮らしやコミュニケーションのコツ、私たちが自然に身に付けている生きるためのコツをお伝えすることで、社会とのつながりを自分で維持したり、あるいは拡大したりということをしています。

この3つを丁寧に取り組んでいくと、ご本人を取り囲む社会資源というのは急速に広がっていきます。ご本人の周りにたくさんの応援者やたくさんの応援の資源が取り囲むと、ご本人自体がコミュニティを自分で動かしたり、増やしたりしていけるようになります。マトリックスにある「コミュニティを動かすこと」ですね。自分で仲間を増やすこと、コミュニティを自分で頼ることができるようになります。私たちはこれが「猫の手バンク」のゴールだと捉えています。そうはいってもそんなに簡単にいかず、成功している事例が多い訳ではありません。そんなふうにマトリックスを使ってみました。

Aさんの事例

ここからは、私たちが関わっている方の事例をもとに、CBRマトリックスを使い、もう一度私たちの取り組みを見ていけたらと思います。先ほど自分の人生のマトリックスをお書きいただきましたが、それと比較してみたいのですが、今からご紹介するのはAさんの事例です。出会った時は1つも「○」が付かない状況でした。こういう方の事例を私があえて選んで持ってきたのかというとそうではありません。草の根ささえあいプロジェクトにご相談にいらっしゃる方の多くは白紙からスタートしています。その中で今回話してもいいと許可をいただいた方の事例の一つ持ってきました。これは私たちの中では特殊な事例ではないということを皆さんにお伝えしておきます。

ここに参加された皆さんの中には真っ白というのはいらっしゃらないと思いますが、この方は真っ白でした(図4)。20代半ばの方です。お父様には精神障害があ



り、息子さんは幼少時から暴言をはかれていたそうです。お母様は優しく素敵な方だったそうですが、彼が 15 歳ぐらいの時に脳卒中で倒れ、半身不随になり、今は車椅子生活をされています。ご本人にはどうも学習障害がおりなのですが、それを誰にケアされることもなく、逆に小学校、中学校では辛辣ないじめを先生から受けていました。でも学校を休むと両親が心配し、お父様は余計精神状態をきたすので頑張って登校していたそうです。なので私は中学校のところにはマイナスを付けたいぐらいです。中学を卒業しましたが、高校に行けるはずもありません。中卒で就職をするのですが、中卒の LD の子が自分で就職活動をするというのは本当にいばらの道で、案の定散々いじめられて引きこもり生活を送ることになりました。

私が出会った時は引きこもり 5 年目でした。その 5 年間は誰にもケアされていないのでマトリックスのマスは一つも埋まりません。酷い幻聴をかかえていらして、女子高生が自分の顔について罵倒するといいます。それが幻聴だとは思っていないので、かなり苦しい生活をされていました。その中で、ご縁があって私たちの「猫の手バンク」が呼ばれたのです。ご本人に何とかしたいという気持ちが残っていたらというのは素晴らしいと思います。

パーソナル・アシスタントとして

私たちはパーソナル・アシスタントとして、彼の家に何度も出向くことになりました。出向いていく中でできることは、彼のしたいこと、かなえてほしいことを実現することしかありません。両隣や近所に女子高生が住んでいるはずだから調べてほしいと言われると、女子高生がいらないか本当にちゃんと見てきて報告したりしました。病院に行く気になってくれそうになると、お父様がお見舞いに来られる距離で、入院させてくれるところと一緒に探しました。彼の気持ちを聞くというような家庭訪問を繰り返しているうちに、彼は意を決して医療とつながってくれることになりました。自分はやはり病気かもしれないという思いに至ったのです。これはチャンスだと思いました。

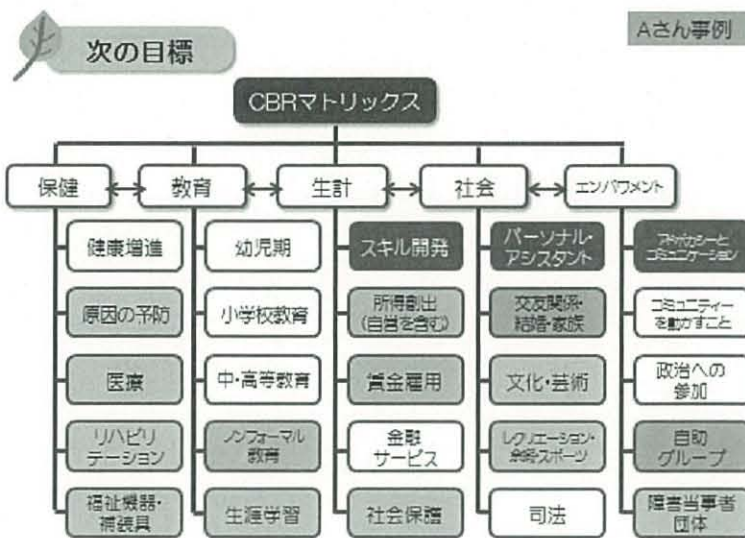
入院期間が長いということで、その間に「猫の手バンク」の人たちに何人も病院に出向いてもらい、会ってもらいました。社会にはいじめをする人もいるかもしれないですが、こういう人も待っているから早く出ておいでということは何度も繰り返しました。そのうちに彼のしたいことが明確になり、病院を出てからはデイサービスに通えるようになりました。本当に活動の場が広がってきました。

社会保障ということでは、彼の自宅は生活保護を受けていましたが、自分の権利としてそれをどう利用しているのかわかりませんでした。マトリックスの項目で言うとアドボカシーとコミュニケーションになるのですが、自分が引きこもりだった時にボロボロにしてしまった住宅を直すお金が生活保護で出るということで、自分でそれを生活保護の担当者に申し出ることができました。業者を入れる時も、普通の業者さんを入れると彼は怖がってしまうので、引きこもりであっても軽く明るく迎えてくれる業者さんに入ってもらいました。案の定、その業者さんはその子が可愛くなってしまい、部屋を改修した後もしょっちゅう家庭訪問に行ってくれています。

彼の部屋を掃除していると、彼が昔描いていた絵がいっぱい出てきました。その絵が素晴らしいので、その業者さんは自分が仕事を休みの日に、地域の活動センターでアートに取り組んでいるところを探して、彼に紹介したりもしています。まさに彼はコミュニティを動かし始めています。それを行っているうちにだんだんと彼もコミュニケーションが上手になってきました。今までケンカばかりしていて、殺すか殺されるかぐらいの親子関係だった彼が、お父様を怒らせないで自分の気持ちを伝え

る方法を編み出したのです。紙に書くこと、そして本当に怒った時はお互い別々に散歩に出るとすっきりするなど、そうした生活のコツを覚えていく中で、家族関係が修復されていきました。人と付き合うのも悪くないというふうに思ってくれるようになりました。そうすると後は話が早く、自分から同じ病院に入院していた子の面倒を見たり、お話をしたりということが起こり始めました。

今の彼の希望は、迷惑をかけた両親に親孝行がしたいということで就労をしたい、働きたいということです。以前は働くのが怖いと言っていましたが、収入を少しでも得るために、訓練をする事業所に通って一般就労をしたい。中学校しか出ていないので少し勉強もしてみたいという希望も語ってくれるようになりました。白紙の状態（前頁図 4）だった時から今はこんなに豊かにマトリックスを埋められるようになりました（図 5）。



(図 5)

私たちのミッション

事例の紹介はこれで終わりです。私たちはこれを全ての相談者の方にできているのかと言われたらとんでもないことで、10人、20人の中の1人ということで、あとは試行錯誤の状態です。日々失敗しているといってもいいぐらいです。何もできていないです。だけど、本当はこの方に限らず、ここにあるマトリックスは全ての方が当然受け取るべきギフトだと思います。彼が困難の中で頑張って、私たちも利用しながら自分の力でここまで埋めたというのは本当に尊敬に値します。でも本当は、ここまで苦勞をしなくても、何かをそれほど犠牲にしなくても、何の引け目もなく、何も誇張された権利意識もなく、誰もがこれらのことを受けとれる世の中であってほしいというふうに思っています。

私たちは今困難にある方々、一つもマトリックスが埋められない方のマトリックスを増やすために、その方の周辺に受け取りやすい資源を提供したり、社会資源とっていないようなものを社会資源に変えたりというような試みをしていくべきだろうと思います。それはすごく難しいことだというのはわかっていますが、それらのことを繰り返し、試行錯誤を一緒にしていく中でご本人と一緒にコミュニティを動かしていくというのが私たちのミッションだと思います、毎日活動しています。

以上、つたないご報告でしたが、ありがとうございました。

上野 渡辺さん、どうもありがとうございました。渡辺さんが仲間の皆さんと発見されたことというのは3つしかないとおっしゃっていましたが、その3つというのはもしかしたらいろいろなつなぎの原点なのかもしれないというふうに思いました。ではバリさん、コメントをお願いします。

バリ 渡辺さんのところには実際に何うことができませんでしたので、今回のお話からコメントさせていただきます。

先ほどのお話の中では、まず3つの要素に取り組んで CBR を実行しようとしていらっしゃることを、とても興味深く聞きました。スキル開発、パーソナル・アシスタント、アドボカシーとコミュニケーションですね。この3つに力を注ぐことによって、マトリックスの他の項目にいろいろな波及効果を及ぼしています。

CBR マトリックスにはいろいろな項目がありますが、これを全て一遍にやらなければならないとは言っていません。どの項目から始めてもいいのです。そして、これは障害のある人のニーズに対応する項目で出来ていますので、やがてはすべてにあてはまるように、というもののなのです。さらに、一つの機関が全部をなささいというものでもありません。今のお話で勇気付けられるのは、他の機関と連携を取って既存の資源を活用して活動を進めていらっしゃる事です。他の機関が他の項目に取り組んでそれぞれの役割を果たしているのです。

それからとても面白いと思ったのは、一人の個人に対して、自分たちがやっていることをマトリックスを使って分析したということです。そこから自分たちの活動を計画したのです。以前 NPO について書かれた文書を読んだとき、雇用創出、人格形成、コミュニティの一員になること、これらが戦略的であるという事が分かりました。

障害をもった人がビジネスをスタートさせた後はフォローアップが非常に重要だという意見に強く同意します。コミュニティの人たちや様々な機関の人たちは、障害をもつ人は成功しないという否定的な見方をすることが多いのです。ですからフォローアップという支援があっても、障害のある人が失敗した場合は、失敗する理由が他にあるという事です。そして、この失敗の原因は、もちろん、人々の障害をもつ人に対する否定的な見方なのです。

最後に、変化が小さくても限定的でもそこから始まるという、渡辺さんの信念を高く評価します。変化は一旦始まれば明るい未来へとつながっていくのです。

ありがとうございます。そしてこれからも頑張ってください。

上野 どうもありがとうございました。変化は小さなことから始まるというお言葉がありました。それではここで休憩に入ります。

◆小グループでじっくりタイム(ワークショップ)

◆まとめの全体会

休憩後、「小グループでじっくりタイム」としてワークショップを行ないました。その結果を全体会で発表してもらいました。

鈴木 グループの話し合いで出た新しい項目を発表していただきたいと思います。

グループ1 一番最初に出たのが「コミュニケーション・スキル」です。「スキル開発」は「生計」の中に入っていますが、本人が社会で生きるための「コミュニケーション・スキル」はどこに入るのだ

ろうかということで新しく項目立てしました。社会からの評価を受けるときの「パブリック・アクセス」という項目立てもしました。

なぜ「居住」がないのかということファシリテーターの方がこだわられておられ、シェルターや緊急避難的な住居など、「居住」を考えるとという項目もあっていいのではないかと考えました。あとは「環境」も新しい項目として出しました。問題解決をしていくためにつながるということで「連携」という項目も新しく立てました。

鈴木 ありがとうございます。

グループ 2 いろいろと議論がありまして、新しい項目を出すということに限って言いますと、私たちのグループで特徴的なことは中間的な支援が機能としているのではないかという話が出ました。CBR マトリックスで出ているいろいろなものにたどり着く前段階でつまづいているということが非常にたくさんあります。そこにつなぐための機能です。「パーソナル・アシスタント」とも少し違う支援です。内容を突き詰めるところまではいかなかったのですが、確かにそういうものもいるのではないかという意見がありました。

そこから担い手の機能ということになりまして、日本の場合は CBR マトリックスのようなものを行政が提供しています。行政がなかなかしづらい部分は NPO や NGO が担っています。日本ではそれを行政がリーチして、NPO、NGO の活動を支援するようなことも用意しておくということがありました。他は「居住」、バリアフリーなどの「環境整備」、連携のための「組織づくり」というものも出ました。以上です。

鈴木 ありがとうございます。

グループ 3 私たちのグループは活発な議論になりました。新しいものは 8 つ出ました。働く側の「ライフワークバランス」ということでは、仕事とプライベートのバランスというのがすごく重要視されていて、そういった視点が CBR マトリックスにはないのではないかと思います。例えば介護が必要になったり、私生活のほうでいろいろな時間が割かれたりする時に、働く時間が調整できないかということです。週 2 日の仕事でも働けないかという議論がありました。

2 つ目は「防災」です。例えば地震、津波、火事といった時は、特に障害のある人たちへの対応が遅くなるのではないかとということで、そういった視点も必要ではないかということです。

3 つ目は「スピリチュアルな支え」です。スピリチュアルというのは霊的という言い方もされますが、WHO のメンタルの尊厳の一つに最近加えられました。宗教とはまた少し違うのですが、要するに物質というよりは人間の精神的な、超現実的な部分が CBR マトリックスにはないのではないかということです。

4 つ目が「性教育と性へのアクセス」です。性教育だけでなく、同性愛などいろいろな性の有り方という視点が必要ではないかということが出ました。

5 つ目は「衣食住」です。住環境ということでは、CBR は家があるということが前提に作られているので、家がない人、阻害されている人に対して、いかに住環境を提供するかです。食ということで、日本では食の安全ということがすごく言われています。衣料品という視点も挙がりました。

最後に「情報へのアクセス」ということが出ました。特に情報アクセスの困難な障害をもっている

人、高齢者などにも届くような、万人に行き渡るようなことが必要ではないかということが挙げられました。以上です。

鈴木 ありがとうございます。

グループ 4 私たちのグループでは「保健」、「教育」などの大きなカテゴリーの中に「環境」というものを加え、その下に6つの新しい項目を考えました。

1 点目は「インフラ」や「衛生」、「きれいな水へのアクセス」、「移動手段」などです。2 点目としては「住居」、「家族に対する支援」です。3 点目は「行政の障害者に対する理解」、行政にかかわらず「社会全体の障害に対する考え方」です。4 点目は「自然で豊かな暮らしにアクセス」できるかです。5 点目は「情報へのアクセス」です。これは、障害のある方がいかに情報にアクセスできるかということと、あとは情報を提供する側がいかにわかりやすく提供するか、ということが含まれているかと思います。6 点目は「紛争のない平和な生活」ができることです。

「環境」という括りとは別に出了のが、このマトリックスというのは二次元的なところで考えられているので、ここに時間軸を加え、三次元で考えられるようなものになると、もっと豊かなマトリックスになるのではないかと。例えば生まれたばかりの障害児の段階、大人になった段階、高齢の看取りの段階とでは必要とされるものが違ってくるので、時間軸に沿ったマトリックスはどうだろうかという意見がありました。以上です。

鈴木 ありがとうございます。

グループ 5 こちらのグループでは足りないものとして、「愛」が足りないのではないかということになりました。施設に行ったとしても職員さんがどれだけ愛情をもって接するかということが大切です。エンパワメントの横に独立して「愛」が必要だということになりました。その通りだと思います。

あとは「エンパワメント」の下に「臨床コミュニケーション」を加えるという案がでました。これはどういう意味かと申しますと、他業種連携でつながっている状態が豊かで強いという意味合いだと思います。以上です。

鈴木 ありがとうございました。

グループ 6 「交通手段」と「ADL」と「防災」という3つが出ました。その他に、「宗教」というものは従来は「社会」や「文化」に含まれるか、「リハビリテーション」と「福祉機器」は一緒にすることはできないのか、「地域の特色」を項目として入れ込む仕掛けが必要ではないか、という意見が出ました。以上です。

鈴木 ありがとうございます。これをネタにもう少し話し合いをしたいという気持ちになってくるぐらいです。1 日マトリックスを使っていただいたら、こんなにもいろいろなことが出てくるんだと、私もびっくりしています。こうして新しい項目を示していくことで、もしかしたら新しい動きにつながるのではないかとこの予感もします。本当に素晴らしい内容を共有させていただきました。この続きは懇親会で話し合ってくださいと思います。この議論が今日で終わってしまわないように、今日がスタートで、ここから更に深めていくことです。これが議論でなく、本当に地域の中で実現され

て充足度が上がることを目指して、今後も進めていきたいと思っています。

バリ 質問ですが、地域の特色ということが出ましたが、例えばどんなことでしょうか。

グループ 5 このマトリックスをいろいろな場所で使うにあたって、少しでもこぼこがあったほうがいいのではないかとことです。地域性というのは、例えば東京のような所から、私は滋賀県ですが、滋賀県の方の引きこもり年数は全然違ったりします。風習、恥ずかしさなど、日本人独特の感じといえましょうか、それがこの中にあるといいのではないかと話になりました。

◆講演者の感想

鈴木 地域版ができると面白いかもしれません。残り 10 分となりましたので、最後に渡辺さん、戸枝さん、バリさんの順番でこのワークの感想をいただいて終わりにさせていただきたいと思います。

渡辺 今日は1日、本当にありがとうございました。とても楽しかったし、勉強になりました。遠方からいらしてくださった方もたくさんいて、すごく感動しました。CBR ということを通して皆さんとつながれたことをすごく嬉しく感じています。最後に出た CBR の新しい項目の一つ一つに私はすごく感動しています。

CBR マトリックスの項目があることで、そうした支援が私たちはできているのか、こういうこともできるはずなのにできていないのではないかと、というような気づきが得られます。項目が増えることで、私たちには本当に愛があるのだろうか、交通アクセスはきちんと支援できているだろうか、連携は放置してないだろうかとか、新たに気づけます。これは一種の発見の場なのかというふうに思いました。ありがとうございます。またよろしく願いいたします。

戸枝 皆さんの新しい項目を見て、CBR マトリックスは守らなければいけないルールではないということが確認できました。いい研修だったと思います。

日本では明治時代に中央集権的な仕組みが作られ、そこからずれる人は駄目な人という文化になってしまったのかもしれませんが。地域の暮らしぶりも、そこに住んでいる人も、幸せの価値観も違うのに一緒にしようとし、無理がある状態になってきていると思っています。僕はこんなに個性的なので、そういう国に在るということがとても生きづらく、それで障害のある人も同じように生きづらいうということに共感して今があります。

一人一人によって、地域によって、場合によっては組織によって目指すべきターゲットが違うということを当たり前にできるような皆さんと、僕たちになりたいという誓いを新たにしました。またいろいろとつながれたらと思います。ありがとうございました。

バリ どうもありがとうございました。お二人がおっしゃったように、CBR というのは柔軟性があるものだということを改めて申し上げたいと思います。国によって、それぞれ状況が違います。このようにしなさい、これに従いなさいというような唯一の形がある訳ではなく、それぞれの国の状況に従って適用していくものなのです。皆さんがそれぞれのグループでやられていたことを拝見してとても

面白いと思いました。多くの興味深い領域が浮き彫りになりました。

CBR ガイドラインが日本語に翻訳中と聞いています。皆さんが挙げてくださいましたいくつかの項目の中には、「災害管理」など、ガイドラインに既に含まれているものもあります。アジア・太平洋障害者センター（APCD）は環境について新しく提案しています。環境ということを挙げているグループもいくつかありましたが、その提案もされています。

最後に、今日は参加してくださいまして本当にありがとうございました。グループの中で質問を挙げてくださったことに対しても感謝したいと思います。むそうの戸枝さんどうもありがとうございました。むそうの実践からもたくさん学ぶことができました。通訳をしてくださった方、招いてくださった日本障害者リハビリテーション協会の方にも感謝したいと思います。鈴木さん、素晴らしいファシリテーターでした。どうもありがとうございました。ぜひ皆さんバングラデシュに来てください。私をはじめ CDD のみんながバングラデシュで迎えたいと思います。

ありがとうございました。

鈴木 バリさんにスタンディング・オベーションで拍手をお願いします。バリさんどうもありがとうございました。皆さん本当にお疲れ様でした。以上で CBR 公開研究会 in 名古屋を終了させていただきたいと思います。上野さんにマイクをお返ししたいと思います。

上野 今日はお疲れ様でした。予想以上の結果が出ましたし、いろいろな気づきが私自身にもありました。皆さんも議論の中で活発な話し合いができたとお聞きして本当に嬉しく思っております。

先ほど鈴木さんのほうから、この結果は WHO に報告されるとありましたが、WHO だけではありません。私たちは CBR のアジア・太平洋ネットワークに入っています。今は 37 の国と地域が入っています。実践者の集まりです。アフリカ、中南米にもネットワークがあります。世界中の CBR の実践者たちが集まり、昨年 11 月には第 1 会 CBR 世界会議がインドで開かれました。2016 年にはマレーシアで第 2 回目の会議が開かれる予定です。その 1 年前の 2015 年には、アジア・太平洋地域の CBR 会議を東京で開催することになりました。

先ほどから CBR はマニュアルではないということが出ていますが、CBR ガイドラインの見直しは 2015 年に行われます。日本からもいろいろな事例、ご意見を聞いた上で、こういうものが足りないのではないかということをまとめ、2015 年に提案するという道筋がありますので、ネットワークの人たちに今日の結果をお知らせしたり、WHO に送ってみたりしながら世界の人たちと意見交換をしたいと思います。皆さんのお考えも深めていただければと思います。

今日は本当にありがとうございます。

◆閉会のご挨拶

特定非営利活動法人名古屋 NGO センター
山崎 眞由美副理事長

上野 最後になりますが、後援団体でもあります名古屋 NGO センターから副理事長の山崎眞由美さんがいらしてくださっていますので一言ご挨拶いただきたいと思います。

山崎 こんにちは。名古屋 NGO センターは、中部地域で国際協力活動をしている 50 ぐらいの NGO が集まった中間支援組織です。バリさんの団体、CDD を支援しているアジア保健研修所も加盟団体の一つです。

今日はランチタイムに厚顔無恥ながらバリさんに「あのプレゼンテーションは駄目だよ」というふうにいきなりガツンと文句をいいました。私は、現地に行って本当にダイナミックに、一つの NGO がここまでできるかと思うぐらい大きな仕事をしているのを見てきましたので今日の発表はそう見えなかったからです。

バリさんの団体は、バングラデシュで未だ制度のない所で NGO がフロントライナーとなって提案し、制度を作る下準備をしています。コミュニティ・レベルでの働きかけから国レベルでの福祉法という法律策定への働きかけを幅広くして CBR の仕組みを作って、全体を動かしていくというとても大がかりなことをしているすごい団体です。

一方、「むそう」・「ふわり」は制度を上手く使えば、愛と思いと目的がはっきりしていれば、いくら欠陥がある制度でもここまでできるという事例を半田で実践されています。

また、制度はあるがそこから弾き出されて穴に入っている人、つまりどの制度も使えない人たちに注目し、制度がない中で勇気ある活動をしている新進気鋭の若い人たちの集まりである「草の根支えあいプロジェクト」、この三つの事例を聞きました。

CBR という言葉を初めて聞いたという人がたくさんいらっしゃる中で、どうなることかと関係者の方は心配されたのではないかと思います。結果をみると WHO に提案できるほどの項目がいくつも挙がっていました。実際に CBR マトリックスを使ってみたという人の話をベースにして理解することの強さを感じました。これこそ CBR です。コミュニティ・ベースというのはいわゆるコミュニティというよりも、人の活動を通し、その人の思いに出会うことによって自身の理解も深まります。そこに気づきがあり、CBR が自分たちの事業展開のツールにもなります。自分たちの活動をくぐって理解できた、その強さだと思っています。

最後に上野さんに感謝したいのは、今まで JANNET は東京中心でしたので、このようなワークショップや研究会は私たちが東京に行かないと参加できませんでした。それを名古屋にアウトリーチし、愛知で活動している人を現場から引っ張ってきて、私たちに出会いの場を作ってくださいました。いろいろと違う言葉と経験と意思をもっている人たちが一緒にワークショップをしてどうなることかと思いましたが、最後には何となくわかったような、腑に落ちたようなところにいったのではないのでしょうか。それがコミュニティ・ベースなんだと思います。私たちが東京に行って理解することではなかなかここまでいきません。ここに来て、ここでやるということに意味があるということをととても思いました。

CBR というのは何も障害分野のことだけではありません。分野を超えて、基本的に何が大事かというのをこのガイドラインで押さえることができます。すごく汎用性のあるものです。今日の出会いをベースにし、それぞれがいろいろな形で助け合い、寄り添って、どこかでもてる力を出し合って、この中部で新たなコミュニティづくりができるといいと思います。

今日はありがとうございました。

上野 大変心に残るご挨拶をいただき、本当にありがとうございました。

これで今日のプログラムを終わりにしたいと思います。お名残惜しいのですが、ぜひこれからも皆さんともつながっていきたいですし、東京にいる仲間たちともぜひつながらせていただきたいと思います。アジア・太平洋の仲間たちともぜひつながっていけるように私たちも努力したいと思います。

バングラデシュから来ていただきましたナズムル・バリさん、ご発表いただいた戸枝陽基さん、渡辺ゆりかさんにもう一度盛大な拍手をお願いします。それからハードワークでずっと通訳をしてくださった林かぐみさんにも拍手をお願いします。それと今日は大変力強いチームが草の根ささえあいプロジェクトから来てくれました。今日は本当にいろいろな面でお手伝いいただき助かりました。ありがとうございました。ぜひお立ちいただいて顔を皆さんに見せていただけますでしょうか。ありがとうございました。

ではこれで今日のセッションは終わりにいたします。交流会ということでロビーのほうにソフトドリンクと軽食を用意しておりますので、お時間のある方はぜひお立ち寄りいただいて講師の方や参加者同士でお話しいただければと思います。1 時間ちょっとの時間ですがどうぞ自由にお使いください。

講師プロフィール

ナズムル・バリ (Nazmul Bari) 氏

CDD (開発と障害センター) 所長

創立メンバーのひとり。17 年以上にわたり、障害のインクルージョンという分野で仕事をしてきた。その中でも関わってきた領域は、組織運営、研修、アドボカシー、ネットワーキング、研究、プロジェクトの企画・運営・評価。また様々な国で障害に関する国際コンサルタントとしても活躍している。国際的な会議、ワークショップでリソースパースンとして発表の機会をもってきた。主な関心領域には、組織の発展プロセス、コミュニティに根ざした障害のインクルージョン、障害のメインストリームへのインクルージョン、災害リスク軽減における障害のインクルージョンが含まれる。

CDD は、障害のインクルージョンに関するリソース組織として 1996 年に設立された。

CDD は開発セクターの障害のメインストリーミングに関する、意識向上、能力開発、技術援助を行っている。CDD はまた、障害者と障害者の組織の能力向上を行っている。CDD は尊重し、尊厳をもつインクルーシブな社会の構築を目指している。

Centre for Disability in Development (CDD)

A-18/6, Genda, Savar, Dhaka-1340

Bangladesh

Call: +88-01710851504

Skype: bari.cdd

Website: <http://www.cdd.org.bd>

Follow CDD on Facebook:

<https://www.facebook.com/pages/Centre-for-Disability-in-Development-CDD-Bangladesh/250416575032408>

CDD... Bringing hope, dignity and meaning to life

戸枝 陽基 氏

社会福祉法人むそう・NPO 法人ふわり 理事長

1968 年 10 月 15 日 群馬県太田市生まれ。日本福祉大学卒業。

卒業後、障害者施設で 7 年間勤務。重症心身障害や自閉症、精神障害の方などに関わる。

退職後、1 年間の準備期間を経て、1999 年「生活支援サービスふわり」運営開始。

翌年法人化して、「NPO 法人ふわり」とする。2003 年社会福祉法人むそう認可・設立。現在は、NPO 法人ふわり並びに社会福祉法人むそう理事長などを勤める。

渡辺 ゆりか 氏

一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト 代表理事

2006 年 NPO 法人起業支援ネット主宰の「起業の学校」を卒業後、社会福祉法人むそうの戸枝陽基さん、活動家の湯浅誠さんとの出会いをきっかけに立ち上げた、制度にのらない人の支援を考える「穴を見つける会」をスタート。

2012 年 4 月に法人化し、「一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト」に。

「誰もが人とのつながりの中で、自分の成長と人への優しさを生み出せる社会」の実現に向け、日々奔走中。

ファシリテータープロフィール

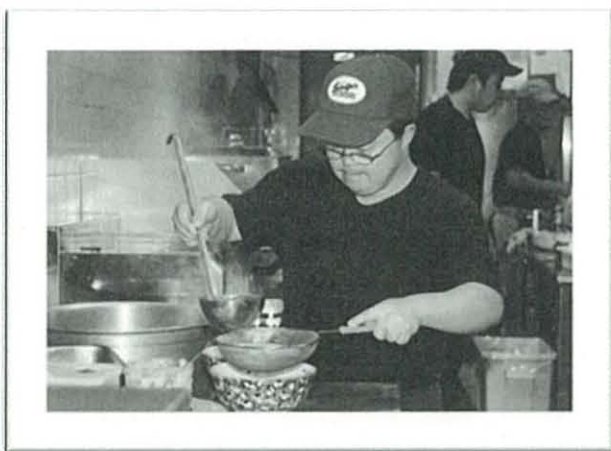
鈴木 直也 氏 NPO 法人起業支援ネット副代表理事

協力団体紹介

社会福祉法人 むそう

子どもの成長を支え、あたたかい“人の垣根”で包み込み、成人から老年期までの暮らしにずっと寄り添っていきたい。むそうは、愛知県と東京都に拠点をもち、「住む」「働く・生きがいをもつ」「余暇を楽しむ・社会に参加する」この3つを基本的な支援とし、大人数による画一的な支援ではなく、少人数で地域に分散し、可能なかぎり利用者の方の要望に添うことのできる支援の仕組みを整えてきました。むそうが大切にしているノーマライゼーションの考え方を実現するためには、【自助】【共助】【公助】のバランスをとることが必要です。中でも不足している【共助】の部分、すなわち「地域支援」の輪を広げていくことが、私たちの役割です。

1. むそう愛知の活動



ラーメンの湯切りの様子

中華茶房うんぷう・アート雑貨・アトリエぐらふいてい

温かみのある木造の中華茶房うんぷう。ラーメンを注文すると、地元の野菜を使ったサラダバーがついてきます。開店当初、ラーメンが出来るまでの待ち時間を「福祉施設だから時間がかかっても仕方がない」と諦めるのではなく、有効活用しようとサラダバーを作りました。今では待ち時間は改善されましたが、お客様に満腹になっていただけるよう、今でも新鮮野菜をお出ししています。

アート雑貨店で店長を務めるのは、重度の障害があるミサキさん。毎日、お店でたくお香を選ぶお仕事をしています。ファンを呼び込んでくれる看板店長です。アトリエぐらふいていは、芸術活動の作品制作・展示ができるスペース。てんかん発作を持つユウコさんは、ここで裂き織りを始めたことで、安全で楽しく活動ができるようになりました。

喫茶なちゅ 有協店・板山店

有協店はリハビリ病院の一角にあります。リハビリを受ける患者に元気を与えたいと、院長さんがスペースを無償で貸してくださいました。イチオシはむそう運営の養鶏場でとれた「なちゅらん」を使ったふわとろオムライス。「好き」や「得意」を活かした役割を担いイキイキと働く利用者さんと、リハビリを終えた患者さんや近所の方で賑わっています。

eko 課・たまごハウスぴよぴよ・きのこハウスによきによき

屋外で働くことが得意な方のための働く場です。eko 課では、障害のある方の就労を通して地域の環境保全に取り組んでいます。地元の方々と協力して、増殖する地域の竹林でとれた竹のペレット化、竹のおがくずを用いたキノコ菌の育成に成功しました。業界初の成功で、注目を集めています。

生活支援センターあっと

障害のある方が地域で暮らすための、様々な支援を行っています。国の制度として放課後等デイサービス、ショートステイ、ホームヘルプを、自治体独自の制度として日中一時支援、移動支援を、私的契約としてレスパイトサービスを提供しています。サービス提供のほかに、アセスメント、サービスの調整や情報提供、申請手続きの支援、医療機関などの専門機関の紹介なども行います。また制度にはない、必要なサービスを形にしていくことも、活動のひとつとしています。

ケアホーム

むそうには4つのケアホームがあります。親亡きあとも、生まれ育った地域で自分らしく暮らすために、世話人やヘルパーが生活に必要な支援をしています。暮らしの場であると同時に、自立に向けた体験の場としても機能しています。

2. むそう東京の活動

チャイルドデイケアほわわ吾妻橋・瀬田

チャイルドデイケアほわわは、医療・看護・福祉が連携した取り組みです。医療的な対応が必要な0～6歳の子供たちが通って、友達や地域の方と遊び、コミュニケーションをとる場所です。自宅で家族とだけで生活するのではなく、地域の一員として、ご本人にとってもご家族にとっても安心して暮らせる社会を作ることを目指します。



お散歩の様子

これからのむそう

今年1月に東京での事業が始まり、今後は京都、仙台への展開を予定しています。ハンディのある・なしに関係なく、一人一人が自由な中で希望をもち、したいようにチャレンジできる社会。誰もが「生きやすい」社会をつくりたい。この思いを、むそうから日本中へひろげます。

<社会福祉法人むそう 本部>

〒475-0859 愛知県半田市天王町1-40-5

TEL:0569-22-4072 FAX:0569-22-4073

一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト

1 沿革

2011年4月に団体の前身となる「草の根プロジェクト」という小さな勉強会から始まりました。2012年4月に一般社団法人化。日々の暮らしの中で「生きづらさ」を抱え、それゆえに様々な困り事で行き詰まってしまっている人の多くが、制度からの支援や保障を受けられず、人々からの手助けも得られず、社会から孤立している状況にある。孤立に苦しみ、光の当たらない暗い穴の中でひとりぼっちでいる人たちを「しかたがないよね…」と放っておけない！という思いで、私たちは活動を続けています。

2 構成メンバー

草の根ささえあいプロジェクトのメンバーは、とても多様でユニークです。障害者、母子家庭、引きこもり、ホームレスなどの各分野の支援者や、看護師、司法書士、行政職員、大学教員、企業の経理やSEなど。様々な立場のメンバーがいるからこそ飛び出すいろんなアイデアが私たちの宝物です。

3 活動内容：

1) 調査研究事業

2012年に行った「社会的孤立や貧困に至るプロセス及び支援のメカニズムに関する調査」など、貧困や孤立に関する調査研究を行う。

2) 相談支援事業

①よりそいホットライン 2012年度から継続

生活に困りごとを抱えた方々からの相談電話を受け、アセスメント・コーディネートを行い、適切な機関に繋げ問題の解決をする。

②名古屋市子ども若者総合相談センター 2013年6月から受託

ニート、引きこもりなどの若年者の社会的課題を解決するために、多分野のネットワークで支え、アウトリーチ・同行を中心とした支援を行う。

3) 福祉サービス事業

①居宅介護事業所 でこぼこ 2013年7月開所予定

障害者総合支援法に基づく障害福祉サービスを提供する。

②猫の手バンク 2012年度から継続

よりそいホットラインやインフォーマルネットワークを入り口に、様々な理由により制度に乗ることのできない困窮者の生活支援をボランティアにより行い、最終的に地域でのささえあいにつなげるお手伝いを行う。

4) ネットワーク事業

①インフォーマルネットワーク名古屋

複数の支援団体が参加し各支援団体だけでは解決に至らない事例の共有、意見交換を定期的
に開催し、重複した問題を抱えた方々を支援する。

②地域中間支援（豊橋市・刈谷市）

昨年立ち上がった豊橋、刈谷のネットワークのコーディネーター業務を行う。

5) ワークショップ事業

①できることもちよりワークショップ

全3回のワークショップで、それぞれ「出会い」「資源化」「組織化」と題し、各支援団
体のストレングスを生かした支援チームを作り支援を行っていく。2012年度愛知県から受託を受け、
開発をしたもの。

②生きてる図書館

人を本に見立て、障害をお持ちの方々や、生きづらさを抱えた方が「本」として参加し、読み
手が「本」を借りて対話をするワークショップを開催。

③草の根研究会（草ラボ）

月に一度の定例会で支援者だけでなく一般の方も参加し地域でのささえあい、社会的包摂など
のテーマについて議論する。

6) 研修普及事業

以下の研修を実施。

- ・生活支援戦略勉強会
- ・ヘルパー研修
- ・生活支援員ボランティア研修
- ・電話相談員研修
- ・講演



4 弱さを表現できる場と「できることもちより」が社会を変える！

私たちは、お互いの持つ弱さを共有し丁寧に認め合い、一方で＜できること＞を＜もちよる＞
ことで、他の誰かの弱さをささえることができる。そんな仲間との小さな「ささえあい」のくり
返しが、どれだけ人生を豊かで生きやすく、楽しいものにするかを実感しています。

誰もが弱さを表現できて、それぞれの持っているステキな部分を「いいね！」と認め合い、地域
の中で役立ちの場所を見出せる社会、誰もが優しさや人とのつながりを感じるこのことのできる社会
を目指すことで、孤立する人を世の中からなくすることができると信じています。

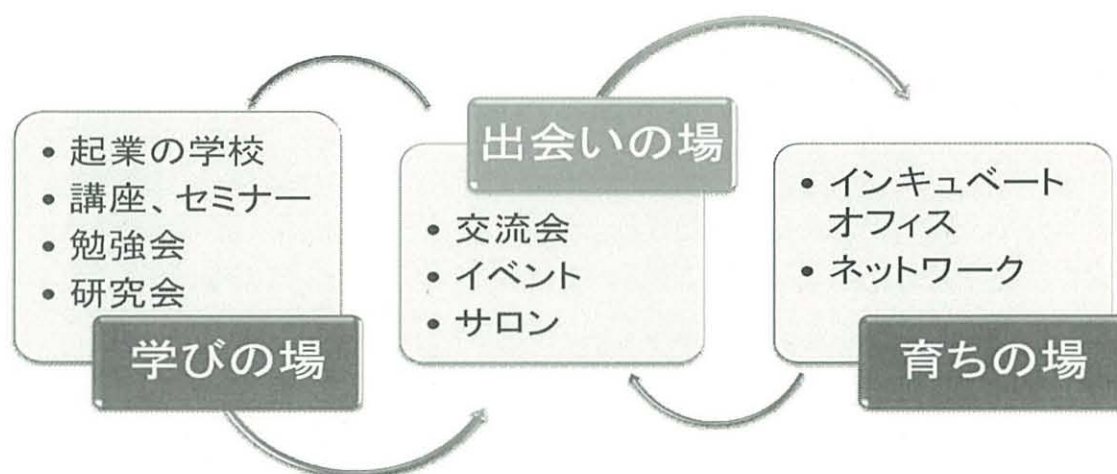
特定非営利活動法人起業支援ネット

理 念：

私たちは起業を「仕事おこし・自分おこし・地域おこし」と捉えています。
一人一人が自分らしく輝くこと・地域の課題を解決・改善すること、そしてお金・仕事・情報・喜び・感謝などの「新しい利益＝新しい価値」が元気に循環する豊かな地域社会をつくること。この3つのテーマを起業支援を通して実現したいと思います。

事業内容：

「起業の学校」「起業・経営相談」等の起業支援事業
起業後のフォローアップ、個別コンサルティング、協働化支援 など



- 沿革：1992 前身「ワーカーズエクラ」誕生。女性の仕事起こし支援にとりくむ。
1998 「起業支援ネット」設立。コミュニティビジネスを対象とした「起業コンテスト」等に取り組む。
1998 特定非営利活動法人 認証。
2004 「コミュニティビジネスガイドブック」発行
2005 起業の学校開校（年1回開校、現在も継続）

公益財団法人 アジア保健研修所（AHI）

●AHIって何？

アジア各国の農村部で人々の健康と暮らしを守るために活動する、現地のワーカーを育成している民間の国際協力団体です。

●AHIがめざしていること - 自立のための分かちあい

アジアの草の根の人たちが「自分たちの健康は自分たちの手で」守ろうという動きを支援していきたいと思っています。そして日本の私たちがその人たちと交流を持ち、学び合いを起こしていきたいと考えています。

●AHIは何をしているの？ - 2つの柱

その1：アジア各地の現地のNGOワーカーを対象に研修会をおこなっています。各自がそれまでの活動を振り返り、今後を考えるための研修です。毎年9月～10月には、愛知県日進市の研修所で5週間の合宿を開催しています。彼らの帰国後は協働事業を展開します。

その2：日本国内で、アジア理解推進の活動をしています。印刷物やプログラムを通して、アジア各国の状況、研修生による開発活動の様子などを伝えて、関心・理解を高めていこうとしています。講演会・学習会からイベントまで幅広く企画を実施しています。

下記は、2012年の国際研修参加者とオープンハウスの実行委員の人たち



* CBR マトリックス日本語訳の最新版は下記ウェブサイトにてご覧ください。

http://www.normanet.ne.jp/~jannet/cbr_net/cbr_matrix.pdf

CBR 公開研究会 in 名古屋
「CBR マトリックスを使って考える」
報告書

2013 年 12 月作成

(公財)日本障害者リハビリテーション協会
〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-1
電話:03-5273-0601 FAX:03-5273-1523
URL:<http://www.jsrpd.jp/>



この冊子は全国生活協同組合連合会のご協力により作成されました。